

363-157

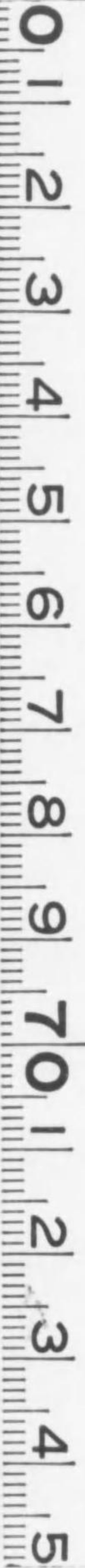


1200600965536

忍術の極意

〇 複写

武俠世界社發行



始



伊藤銀月著

忍術の極意

東京 武俠書界社

363

157

忍術研究の最初の概念を予に興
へられし越後長岡の奇士谷村釣
雪君に此の書を呈す。

著者



I種
W



1200600965536

目次

(一) 忍術に對する誤解を正す……………一—四六

イ 近頃世人の注意を新しくしたる忍術と云ふ語……………一

ロ 忍術は魔法にあらず又催眠術にもあらず……………四

ハ 忍術は何人にも研究し得べく何人が研究しても興味あるもの……………九

ニ 忍術に於ける秘密の傳書と忍術の流派……………三

ホ 忍術の略史と忍術者の逸話……………三

ヘ 忍術と云ふものゝ概念と其の研究方の大要……………四二

(二) 忍術の形體的方面……………四九—七三

目次

一

目次	二
イ 研究上の便宜より別ちたる忍術の二方面	四九
ロ 忍術の七方出(變裝術及び變相術)	五一
ハ 變裝術及び變相術に伴ふ諸種の重要な研究	五九
ニ 忍術の六具	六二
ホ 之を漏らせば忍術者に暗殺せらるゝを免れざる至極の秘事	六四
ヘ 忍術に於ける特殊の歩き方	七〇
(三) 忍術の形體的方面に就て秘奥の部に屬する	
五遁の術	七四—一四四
イ 表五遁と裏五遁との十法及び三遁の術	七四
ロ 隱身遁形の術の基く所	七六
ハ 木遁の術	七九

目次	三
ニ 火遁の術	八三
ホ 土遁の術	八八
ヘ 金遁の術	九三
ト 水遁の術	九六
チ 人遁の術	九九
リ 禽遁の術	一一二
ヌ 獸遁の術	一一五
ル 蟲遁の術(蛇の術、蝦蟇の術、蜘蛛の術)	一二一
ヲ 魚遁の術	一二七
ワ 天遁十法の要領	一二八
カ 日遁の術	一三〇
ヨ 月遁の術	一三一

目次

タ 星遁の術……………一三三

レ 雲遁の術……………一三三

ソ 霧遁の術……………一三三

ツ 雷遁の術……………一三五

ネ 電遁の術……………一三六

ナ 風遁の術……………一三六

ラ 雨遁の術……………一三七

ム 雪遁の術……………一三八

ウ 隱身遁形の術の科學的解説……………一四〇

(四) 忍術の形體的方面に於ける無色無臭無聲

の極意……………一四一—一四四

イ 無色無臭無聲とは何ぞや……………一四四

ロ 無色の極意……………一四五

ハ 無臭の極意……………一四六

ニ 無聲の極意……………一五〇

(五) 忍術の心意的方面……………一五五—一八〇

イ 忍術に於ける心意的方面の概説……………一五五

ロ 精神と身體とを併せての統一(質に於ては尋常一様、量に於ては神秘靈能)……………一五六

ハ 地方々々の言語、風俗、人情を模擬する事……………一五七

ニ 天候氣象を豫知する練習……………一六二

ホ 地理的方面及び旅行に關する素養と實用……………一六九

目次	六
へ 鑑識に關する方面………	一七五
ト 觀相術及び人心觀破術………	一八五
チ 人を謀るの術………	一九六
リ 呪文結印と其の正當なる解釋………	一九三
ヌ 忍術を研究するの效果………	一九七

目次終

忍術の極意

伊藤銀月著

(一) 忍術に對する誤解を正す

イ 近頃世人の注意を新しくしたる忍術と云ふ語

忍術と云ふ語が、近頃新しく世人の注意を呼ぶ様になつたのは、一寸面白い現象と云ふ事が出来るであらう。活動寫真などで、大分此の忍術者、即ち所謂忍術使ひの事を仕組んだ映畫が、一般に歡迎される様である。淺草あたりへ行つて見ると、さも〜人に不思議と思はせる様な繪看板を掲げ、これに、忍術云々の説明を加へて、一般の好奇心を釣らうと努めてゐる。講談本の様なもの

忍術に對する誤解を正す

でも、忍術に關するものが好く多くの人に讀まれると云ふ話である。

けれども、以上の事實に依つて、眞の忍術と云ふものは怎麼ものであるかと云ふ事が、些でも明かにされたかと云ふに、私は不幸にして否と唱へなければならぬ。寧ろ、其の爲に却つて、忍術なるもの、真相が世人の目に對して掩はれ、實際とは殆んど縁も無い程に遠い事を、忍術と誤り傳へらるゝに到つたのは、何事にも正確な研究の重んじられる現代に於て、甚だ怪しからぬ事と思ふ。更に一步を進めて云へば、世道人心の爲にも、之を機會として、眞の忍術と云ふものを、一般に知らしむる必要があらうと思はれる。眞誠の忍術と云ふものは、何人にも研究が出来るし、又、研究して見ると却々面白いものである。

私は、今日の様に忍術と云ふ語に世人が注意を拂はなかつた時代の、殆んど二十年以前から、自分の一生の事業の一つなる、戦國時代の歴史の根本的研究に資する必要から、忍術の何物なるかを窺つてゐたので、其の爲、約十年前

に、東京朝日新聞に忍術の概要を十數日間連載した事がある。其の後それが、小冊子の單行本ともなつて出てゐる。それから三省堂が始めた『日本百科大辭典』のナ行ニの部に、忍術と云ふ題目が出た折にも、他に忍術と云ふ事を研究してゐる人が無いと云ふので、私に其の執筆を求めて來た。そこで私も、恣意風に、日本に於ける現在唯一の忍術研究者と認められた以上、それに相應した研究を積まなければならぬと思ひ、更に、諸書諸記録に依つて、眞の忍術及び忍術者の事蹟を尋ね、忍術に關する秘密の傳書などを掘り出し、種々の點からそれ等を解剖した結果、辛と纏まつた一書を編述し得るに及んだのである。

どうか此の、忍術と云ふものは何人にも研究が出来るもので、又、研究して見ると却々面白いものであると云ふ事と、それから、忍術には秘密の傳書があり、それが大抵、鼻紙にされたり、臺所の障子に貼られたり、屏風や紙門の下貼にされたり、干物屋の紙袋にされたりして、痕を失ひ乍らも、なほ何所かの

隅に、塵に塗れ、蟲に食はれて、辛うじて形を保つてゐるものが、無きにしもあらず、以て銀月に研究の資料を與へたと云ふ事とを、先づ記憶して置いて置きたい。

□ 忍術は魔法にあらず又催眠術にもあらず

忍術と云へば、直ぐに聯想されるものは、所謂魔法幻術の類である。即ち、一般の人は、忍術と云ふものは魔法幻術の一種であると思ひ、少くとも、魔法幻術を應用しなければ出来ないものゝ様に思つてゐるらしい。印を結んで呪文を唱へると、自然に嚴重な戸締りが明いたり、不寢番の者が正體も無く睡りこけたり、或は、大事に仕舞つてある品が自然に飛び出して懐へ入つたり、又大蛇を出し、大入道を現はして、人を嚇かしたり、仁木彈正の様に鼠と化けたり、犬山道節の様に、一閃の火を得れば直ちに姿を隠す火遁の術を行つたり、兒雷也の様に蝦蟇を使つたり、大蛇丸の様に大蛇を使つたり、綱手の様に蛞蝓

を使つたり、空を飛び、雲に乗つたりすることの出来る、不思議の術の様に信じてゐるらしいのである。これが抑も誤れるの甚だしきものであつて、忍術の何物であるか、現代に傳はらなくなつたのも、要り、此の誤解が真相を掩うたからである。

さればと云つて、忍術には、大蛇の術や、大入道の術や、鼠の術や、蝦蟇の術や、蛞蝓の術や、又火遁の術と云ふ様なものが無いとは云はない。殆んど自然の様に嚴重な戸締りを明けることも出来るし、殆んど自然の様に、大事に仕舞つてある物を懐へ飛び込ませることも出来る、殆んど自然の様に不寢番を睡らせることも出来る。けれども、それ等は何も、印を結び呪文を唱へた結果なのではない。忍術と云ふものは、印を結んだり呪文を唱へたりすることを教はると、容易くさう云ふ不思議が出来ると思つたら、そりや飛んでも無い間違ひ(尤も、印や呪文の事も此の書の中に記してあるが、それは別に效驗があるので、

精しく後の章に述べてある)で、要り忍術は、密偵潜行の目的の爲に有らゆる困難危険に打ち勝ちつゝ、遂行する方法で、何處迄も物理的、心理的、且つ數理的なものである。此の三つの理を詮じ詰めたものを土臺にして、頭腦と身體とを十分に訓練した上で、初めて忍術は自然の様に行はれるのである。

兎に角忍術と云ふものは、奇道にして正道ではない、約言すれば頗る劍呑な術である。物騒な法である。けれども、忍術の奇道たるは、兵法の危道たる、同じ性質、同じ資格、同じ地位のものであつて、決して泥棒の術なのではない、忍術の傳書にも、

忍術は決して盜賊術と同一視すべきものではない。天下國家の大事の爲に行ふべき爲のもので、天下を治むる將軍を始め、諸侯が忍術者に祿を與へて置くのは、此の爲である。故に、若し一個人の私欲の爲に之を行ふ時は、其の術必ず破れて、身を亡ぼすに到る。

と教へ示してあるのである。又忍術を心得て置くと、孫吳の兵法が今でも社會生活の活戰場裡に應用し得るが如く、世の中に處しての正當の驅引に之を應用することが出来る。さうして、忍術の何物なるかを明かにして置く以上、決して人に忍術を掛けられて困り果てることなどの無い利益があることを思はなければならぬ。大蛇の術も、蝦蟇の術も、蛙蟪の術も、忍術を知つてゐる者には掛からないのである。此の點に於て、忍術を知つてゐることが、護身の爲に必要であるとも云ひ得られやう。

それから、忍術は魔法幻術の類ひであるなど、漠然たる舊式の見解を懐いてゐる者の外に、それは催眠術の一種であらう、少くとも、催眠術を應用するものであらうなど、やゝハイカラな頭腦を以て之に對する人もある。成程、催眠術や催眠術が、つた事の流行する時代で、變な事をして人の病を癒す怪しい奴の跋扈する世の中であるから、さう思ふ者の少くないのも當然であるが、

これも亦全くの見當違ひである。譬へて云へば、忍術は飛行家の飛行機に依つて空を翔ける様に、潜水者の潜水衣に依つて淵に沈む様に、不思議な様で不思議でない方法に依り、物理的に且つ心理的に、十分身體と頭腦とを訓練し抜いた人のみ、唯だ之を行ひ得るもので、之を行ふには。一定の數理的規律を踏みつゝ進退すると共に、時と所とに依つて用ゐべき種々の器具がある。さうして、言語と行爲とに依つて人を謀る驅引が、忍術に於ては重要條件の一つなのである。決して、忍術は催眠術の一種ではなく、又催眠術の應用に待つ所の方法なのでもない。

既に魔法でもなく、亦催眠術の種類でもないとすれば、忍術は忍術として、何處迄もそれに本源的な性質を認むべきものでなければならぬ。忍術を忍術として研究する必要は此に在り、忍術を忍術として研究する興味も亦此に在るのである。さうして當然に、忍術を忍術として研究し得た効果も亦、何物から得

來つた所と異なるものでなければならぬ。

ハ 忍術は何人にも研究し得べく何人が研究しても興味あるもの

扱て、忍術と云ふものは、前述の如く特殊に且つ本源的のものであつて、忍術其の物を體得して、實地に臨み自在に之を行ひ得る様になるには、頭腦と身體と共に特殊の素質を持つた者でなければならぬが、併し、忍術の何物なるかを研究する事であるならば、何人にもそれが出来ない理由が無い。男でも、女でも、老人でも、青年でも、怎麼地位の人でも、怎麼職業の人でも、決して差支は無いのである。さうして、無論何人でも之を研究したゞけの効果を收めることが出来るし、同時に、何人でも之を研究するの興味を覺えることが出来る。此の興味は蓋し随分に深いものである。

何を以てさう云ふかとなれば、昔忍術者と云ふものが職業であつた時代には、先づ、忍術者養成の必要條件として、其の練習生たる者に固有の資格を要求し

たものである。即ち、身體の強健にして而も輕捷なるもの、頭腦の機敏にして而も沈着なる者、身心の兩面を併せて、此の四つの要素を具備した者でなければ、忍術練習の候補者となることが出来ないとしてある。身體の強健な者はあるが、強健な者は動もすれば肉が肥えて身が重く、逆も輕捷と云ふ譯には行き難い。強健で而も輕捷と云ふ、獸なれば豹の様な身體を持った者は、却々多くは得難いのである。これと同じく頭腦の機敏なものはあるが、機敏な者は多く輕卒に流れ易く、どうも沈着とは行き難い。機敏で而も沈着な、鳥ならば隼の様な頭腦を持った者も、怎うして、滅多に見出し得ないのである。それであるにも拘らず、眞誠の忍術者となるには、此の一見相牴觸する様な四つの長所を、身心兩面に持たなければならぬとすれば、獨り忍術者たる事の難きのみならず、先づ、忍術練習の候補者たるべき資格に於て、まごつかざるを得ざる者が幾人あらうと云ふ事になる。

けれども、現代に於ては、忍術者と云ふものに祿を與へて抱へる人もなければ、忍術者營業の看板を掛けて衣食の道を得られる譯でもない。さすれば、何も身心の兩面に四つの長所を備へた者を詮議する要も無く、又、是等の長所を具備した者でなければ、忍術の門を窺ふことが出来ないと言ふ譯でもない。要する所、人々各自に自分々々へ宜しき様、忍術の理論を實地に當て嵌めて研究すればいゝのである。さうして、これだけならば、前にも述べた通り、忍術は魔法でも催眠術でもなく、物理的、心理的、且つ數理的に、其の目的に向つて理論と實地との一致を求むるものなる以上、何人でも之を研究して相應の効果を得得べき筈である。少くとも、恚う云ふ態度で忍術を研究した結果は、寧ろ其の本に歸つて、身體を強健に且つ輕捷にし、頭腦を機敏に且つ沈着にするの資けとなつて、自己を訓練する上に少からざる利益が得られるのである。

第一、恚う云ふ態度で忍術を研究するの興味は、實に何物にも比べ難く甚深

なもので、忍術的起居動作、忍術的衣服飲食、忍術的言語應對、忍術的調査觀察、忍術的談判交渉、忍術的往來出入等、日常の行事もすべて研究の材料で、更に進んでは、遁形の術印ち、木遁、火遁、土遁、金遁、水遁等、五行に象つた五遁の術から、人遁、禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁等、動物に寓した五遁の術（五行に象つた遁形の術を表五遁と呼ぶに對して、動物に寓した遁形の術を裏五遁と云ふ）迄も究め、之を日常の行事に當て嵌めて考へる段になると、其の興味愈々加はつて、酌めども盡きざる酒の如く、而も、私の研究法に依る時は、何人と雖も、苦しまずして此の興味を嘗むることが出来るのである。犬山道節が火遁の術は、無論此の表五遁に屬するもので、仁木彈正が鼠の術は裏五遁の獸遁に屬し、支那三國時代の左慈と云ふ魔法使ひが、羊の群に飛び込んで姿を隠したとあるのは、矢張り此の獸遁の術を誇大して傳へたもの、それから、兒雷也の蝦蟇の術、大蛇丸の蛇の術、綱手の蛞蝓の術などは、蟲遁の術に他ならな

いのである。水遁だの、禽遁だのと云へば、何だか食物の名の様に聞こえて滑稽であるが、研究して見ると、成程と首肯出来るであらう。

二 忍術に於ける秘密の傳書と忍術の流派

兎に角、忍術と云ふものは、戰國時代から徳川時代に運つて、諸侯が其の専門の技術者を養つたに特視されたものであつて、十分に専門の研究と練習とを要するのであるが、必要上成るべく、どの大名に怎う云ふ忍術者がゐると云ふ事すらも秘密にしたもので、随つて、忍術者の職も、忍び目附と呼んで目附役の下に附けられるものと云ふことだけは判るが、平常には他の事をしてゐるので、何の某が其の忍び目附であるか判らないと云ふくらゐに、出來得るだけ秘密々々との方針の下に置かれたものであるから、其の傳書など、云ふものも、餘程秘密に取扱はれたに相違無く、今日之を研究するに當つて、其の材料の乏しきを歎じなければならぬのである。私の研究の最初の材料、即ち

研究の根柢となつたものは、此の乏しい材料を盗つて、辛うじて集め得たもので、實に左の三種である。

(一) 越後國長岡の志士谷村伊八郎氏が、其の家に藏せられる甲賀流の忍術傳書に依り、談話及び筆記を以て示教せられたもの。

(二) 種々の断片的記録、諸書の拔萃、及び古老の傳説に依つて集め得たもの。

(三) 寛保年間(今を距ること約一百七十年前)に於ける、伊賀流の忍術者名取兵左衛門(青龍軒と號す)の傳書「正忍記」を讀んで、得來つた所のもの。

就中、谷村伊八郎氏が與へて呉れた材料は、私に忍術研究のヒントを與へて呉れたものであつて、それが第一の基礎を成してゐるだけそれだけ、多くの重要條項を含んでゐるが、併し、纏まつたものとしては、紀州に仕へた忍術者、名取青龍軒の「正忍記」を推さなければならぬ。これは、天地人三卷の寫本になつて、上野の圖書館に在るが、恐らくは、忍術に關する纏まつた記録とし

て現存するものは、此の一書ぐらゐであらうと思はれる。忍術の何物なるかを知らない人がそれを讀んだからとて、一向得る所も無く、又、興味を感じ得ないものであるが、一たび忍術の概念を得てから之を繙くと、一々成程と首肯される點ばかりである。本書は、此の三通りの材料に依つて、私が研究して發表するものであるが、成るべく判り易い様にと努めて書いたことは、申す迄も無いけれども、前にも述べた通りの特殊のもので、其の傳書には必ず、

此の書は當流忍の純粹の奥極也。先師より以降、唯受一人の外、更に受授せずと雖も、今子の懸望に依り、聊かも殘す所無く許授せしむるもの也。

慎んで宜しく練熟すべく、猥に他見せしむべからず。(原文は格に合はぬ鶴的漢文)

と奥書がしてあり、中に説く所も、少し面倒な部分になると、大概「此外口傳」として、筆で記されぬ事にしてあるのであるから、それ等の域に迄筆を着けた

本書を讀むには、一通り判る所でも、なほ、再讀三讀して十分に研究を積まれんことを、豫め讀者諸君に願つて置くのである。

なほ、ついでに述べて置くことは、忍術には種々の流派があり、又、國々に依つて忍術者の呼び方も異ふのであるが、其の大本に遡ると、甲賀流、伊賀流の二大派に別れる。然し、これも元來は流名なのではなく、甲賀者、伊賀者若しくは甲賀衆、伊賀衆と云つて、出身の土地の名に依つて區別したのが、其の始まりである。これに就いて述べることがある。

戰國時代に入つて、群雄割據の舞臺が開けると、諸侯はすべて其の必要上から、争うて一藝一能の士を招聘するに力を注いだもので、即ち、間諜探偵を本職とする所の忍術者なども、亦必要缺くべからざるものとして、需要せられたのであるが、扱て、忍術者は何處に求めたら得られるものであらうかと云ふ問題の下に於て、特に需要者の注目を引いたのは、江州の甲賀郡と伊賀の國との

兩地方である。「日本百科大辭典」第五卷「さ行」の部に、

しのび〔忍〕 變装して敵地等に入り、動靜を諜知する者。「しのびのもの」とも稱し、鎌倉幕府以後戰時敵中に紛れ入りて間隙を窺ひ、暗殺、放火を行ふ等の事、諸書に見えたり。太平記平石城軍の條に、結城氏の若黨四人赤坂城に忍入りて放火を企てたる事等見え、後、戰國の世に至りては、諸國大名等の交戦にあたり、互に間諜を放ちて敵情を諜知するを常としたり。もとより定職にあらざれば、其の身分等に就きて定まれる事なかりき。多門院日記に忍者伊賀衆の名見え、松原自休手録に伊賀忍者の名見えて、伊賀國の地侍等最も此の術に長じたりと云ふ。武家名目抄に、伊賀、江州甲賀には地侍多く、應仁以後各黨を立て、日夜戰爭をなし、強竊盜をなすもの多く、自ら間諜の術に長じたりしを以て、諸大名各これを養ひ置きて、忍びの役に従はしめ、伊賀者、甲賀者など稱し、又これらを總

忍術に對する誤解を正す

稱して忍組といへるよし見えたり。又當時間諜の一種に透波、亂波、突破等稱する者ありて、いづれも信長記、甲陽軍鑑等に見え、又北條五代記に『其頃は其國々の案内をよく知り、心横道なるくせ者多かりし、其名を亂波と名付け、國大名衆扶持し給へり』など見えたり。武家名目抄に、以上いづれも一種のものなれど、大抵關東にては亂波と稱し、甲斐以西にては透波と稱すと説けり。

とあり、又、塙保己一著「故實叢書、武家名目抄」(職名部) 卷六、「忍目附」の條に、

按、忍目附は常に定め置かる、一職の名にあらざる、すべての目附にもあれ歩、中間、小人の目附、又は近臣、忍組等の者にもあれ、主家の命をうけて他方に潜行し、其の地の形勢を探り得て、反告をなすものを云へり、忍組は伊賀者甲斐近臣にても此役にさるゝことは、主人より直ちに命ぜらるゝに

便あればなるべし。もとより人にさとり得られざるを旨とするが故に、商賈のさまにまねび、虚無僧、放下の形をもちりなどして、他國に赴くならひなり。されば、人にも知られたるすべての目附職たる者の、これを役するは少く、大かたは徒立の輩うけ給はりしと見えたり。後の世、隠し目附、又は隠密など云ふもの、皆此の流なり。尙目附の條と照し考ふべし(銀月附記、目附一名横目は、監察密告を司る役であつて、これに、大横目、總横目、歩横目、中間横目、小人横目、忍目附等の名がある)

とあるに依つて、其の大意を知ることが出来るが、なほ精しく云ふと、近江國の北部なる甲賀郡は、山谷が多いのに、土着の武士がそれに住んでゐる爲、所所の谷際に挟まれた掌大の地を各の領分として、險隘を頼み、些かの身分乍ら、互に相持して下らず、其の故、小黨分立して、戰國時代には斷えず小促合ひばかりをしてゐたものである。伊賀國もそれと同じく、一國とは云ひ乍ら、

大きい國の一郡よりも小さい區域である上、矢張り山と谷ばかりの土地なのであるから、地侍即ち土着の武士の生活状態も、其の小黨分立して小促合ひを繰返してゐる形勢も、とんと江州甲賀郡をそっくりである。而も、兩地共に、當時の首府で文華の中心たる京都に近い事であるから、人間も疾うに開けて狹くなつてゐる。で、是等の地侍の小促合ひと云ふものは、戦争と呼ぶよりは寧ろ強盗盜の仕合ひと稱すべき程に、小規模を極めたもので、御負に、山谷林藪の峻險な部分を超えて、互に謀り合ひ、互に撃ち合ふのであるから、怎うしても、偵察の術に長じた者と、猿の如く、鼠の如く、絶壁を平地の如く飛び渡る者どが、勝を占むることとなり、随つて、さう云ふ風に土着の武士が代々訓練され來つた結果、忍即ち密偵潜行の役目には、甲賀者と伊賀者どが一番適してゐると、戦國時代の一般人から相場を定められ、之に依つて、甲賀者、伊賀者と呼びつゝ、争うて兩地産の武士を忍術者に採用し、それ等の團體の稱呼、及

び總稱をば、甲賀衆、伊賀衆と呼び慣らはすに至つたのであるが、扱て、恚う云ふ具合に、甲賀と伊賀どが自然對立させられた結果は、兩派相別るゝに至るのが當然で、終には、忍術其の物にも、甲賀流、伊賀流の流派を立つるに及び更に時代が移つては、以上二大流派の中から、又々幾個かの小分派を生ずるに至つた。但し、それ等は極めて些末の相違に過ぎないので、忍術其の物の本質には變りが無いけれど、前に私が述べた通り、又「武家名目抄」にもある通り、役目其の物から秘密を旨として、公然其の職を置かないのであるのみならず、目附職でも人に名や顔を知られた者は此の役に適せず、徒立ちの身分軽い者が承つて、功を奏すれば褒美の金、即ち一時賜金を貰ふと云ふぐらゐの習はしに過ぎなかつたので、傳説の上からも、記録の上からも、忍術者なる者の真相が世に傳はらないと共に、忍術其の物も亦世人の前に不可知視せらるゝに至り随つて、それが神秘視せられ、種々の臆測を加へ、忍術には多くの流派があつ

て、奇怪の法術を聞はしたものの、様に、荒誕無稽の俗説を醸し出だし、それが今日活動寫真や講談本で見える所の、所謂忍術、即ち架空的忍術と成り下がったのである。斯くて斷案を下せば、今日俗間で云ふ所の忍術は、眞の忍術とは何の關係も無いものである。

ホ 忍術の略史と忍術者の逸話

ついでに、忍術なるもの、沿革を略述して置くのも、無益の業ではあるまい。先づ其の起源に就いて云へば、

(一) 最初は支那から渡つたのへ、日本人が、特殊の研究工夫を加へたものであると云ふ説。

(二) 日本人が其の必要に依つて研究工夫し始めたのへ、段々支那の方法を加へて、それを進歩發達せしめたものであると云ふ説。

の二種の中、私は第二の説に同意仕様と思ふ。漢書や五雜俎に、遁形の術の事

を記してある。遁形は即ち、前に記した木火土金水の五遁であるが、併し、日本の忍術が、此の木遁だの、火遁だの、土遁だの、金遁だの、水遁だのと云ふそれ等の物質及び現象に依つて形を隠す所の、支那の方法に起源したものは思はれない。是れ等の方法は、日本の忍術が成り立つた後の、早くとも戰國時代に及んでから、參酌して研究し始められたものと思はれる。

最初忍術と云ふ事が記録に留められたのは、源義經勇士を選んで、之に用ゐたとあるのであらう。その他、鎌倉時代から南北朝時代に及んで、敵軍・敵陣、敵城、若しくは敵地に紛れ入り、隙を窺つて暗殺、放火などを行ひ、重要な物或は人を盗み出だす事の爲に、其の方法の講究されたのが、即ち忍術であることは、前にも引證した通り、『日本百科大辭典』が太平記に依つての例を擧げて述べた所を見ても、首肯し得られる譯であるが、なほ、楠正成は好んで此の忍術者を使つたと傳へられてある。成程、智慧者の正成の事ではあり、殊

には正成が根據地の河内も、矢張り伊賀と接近した地で、こせしくした山谷の間に小促合ひを事として来たものであるから、忍術者を用ひたと云ふのも嘘ではあるまいと思はれる。正成が泣男を用ひて敵を欺いたと云ふのも、矢張り忍術の一つなのである。

それから、『武家名目抄』「忍目附」の條に、いろ／＼忍術に關する歴史的人物がある。而もそれ等は諸書から引用したものである故、其の儘に轉載すると、

『越後軍記』に云景虎越中國天文十七年景虎越中表へ攻入らんと欲して軍裝頻りなり。近習の者七人に聞物役を云附、三人は甲州へ遣はし、四人は越中、能登、加賀に往かしむ。聞物役は忍の者、或は目附、横目と云へる類なり。依之國主の政道、群臣の行跡、庶民の風俗に至るまで、日々注進せしかば、國々の善惡を具に知玉へり。

『奥羽永慶軍記』に云合戰條 則頼は舟越の在家を焼きはたらく。浦本名譽

の兵にて、兼てよりこ、かしこに目附を忍ばせおきたれば、敵舟越に來らざる以前に、半勢に舟越の在家人を合せて千餘人、三方に待かけて淺利が勢を中に取込云々（按ずるに、こ、にいふ目附は、歩士若くは中間、小者の目附なるべし）

又云山路藤十郎小栗義光兩方を押静め、小栗宮内に對して、汝大將を討たんと心がけし武功は神妙なれども、手柄は山崎に劣れり。汝、大將の首と土民の首と同事なるべからずと云こそ不届なれ。斯るためを思ふが故、兼て目附の者に誓紙を書かせ、其上穩密の目附を以て具に聞届たり。

『大友興廢記』に云日州御出陣其時老中各申さるゝは、大隅、薩摩兩國は不案内の地に御座候へば、先づ修行者或は商人などのやうにて案内をみせ、所々繪圖をもつて、道つゞき、城の次第、高城表も其ほかやうたいをきこしめし、其後日州高城にめしかけられては、いかゞ御座あるべく候やと

申あげらる。

『義光物語』に云生害條 里見越後一門引連、上下五百餘りにて最上を立退、諸國を廻りけるに、越後守名高者なれば、加賀中納言殿にても三萬石の領地を可賜とて被召抱けるに、内々如斯可有と義光公思召ければ、越後守最上を立退候時分より、伊賀の忍の者二十人宛目附に被遣ける間、加賀にて被召抱候儀、則ち山形へ注進致けるに依て、中納言殿へ使者を被遣、御斷被仰入候間、亦加賀を浪人致し、越前少將殿へ二萬石にて罷出候、これも右のごとくにて候。

又云 於天堂原 義光公の御心底を計見るに、御遊覽の爲馬揃被仰附たるには不可有、御馬揃に事を寄せ、武器馬具のふるさをも改め申様にとの御存念たるべし。此儀豫てより御催しの事なれば、近國の諸大將、最上の騎馬數をしらん爲、目附を差越たまふ段、其隠なし。左有とて。見物法度と有儀

も亦せまき事成間、俄に御歸城有けるかと覺たり。

以上の外、同書の「忍上手」と云ふ條を見ると、左の物語がある。

『奥羽永慶軍記』に云 最上畑屋 畑屋城中に名譽の忍の上手有しが、其夜敵陣に忍び入、直江兼繼が番指物一本、鐵孫左衛門が陣屋の吹貫一本取て歸り、城の大手口高き所に立て置きたり。

これに依つて見れば、九州から奥羽に至る迄、戦國時代の大名は一般に忍術者を利用したもので、出羽山形の城主最上義光が、自分の臣下の巨頭が一族を引連れて退散すのへ、伊賀の忍びの者を二十人附けて、動靜を探らしめたと云ふ程、それ程、伊賀衆、甲賀衆が全國の大名に調法がられた情態が窺はれるのである。

又、戦國時代に於ては、蜂須賀小六の例にも見える通り、苟くも手腕と頭腦とがあつて、志を改め發奮したならば、今迄盜賊をした者であつても、諸侯

が之を用ゐることを厭はなかつたので、北條氏康が風麻と云ふ盗人へ知行を興へて、國々所々へ出だし、密偵の役目を行はしめたと云ふ話がある。甲州の信玄なども、好んで透波と名づくる忍術者を用ゐたもので、これも亦其の國の盜賊から拔擢したのださうである。

なほ、「北條五代記」に依ると、忍びの者の或る種類を「草」と呼ぶ一異例がある。

「北條五代記」卷第八、「物見の武者はまれ有事」の條。(前略)されば大將軍出馬し對陣を張る時は、敵もみかたも前手の役として、夜に入れば、足輕共さかひ目に行き、草に臥て敵をうかひ、あかつきには歸る。これを草とも忍びとも名附たり。夜の草晝迄残ることあり。これを知らず物見の武者さかひ目を過ぐる時、かの草おこつて歸路を取きりうたんとす。其節に至つては、馬達者を力とし、野へも山へも乗上げ、はせ過ぐる事、兼て

案内になくは叶ひがたし。(中略)天正十三年の秋、佐竹義宣と北條氏直、下野の國に於て對陣を張り、東西に旗をなびかす。氏直麾下より物見を五騎さしつかはさる。さかひ目へ乗出し、敵の軍旗をはかる所に、其内に、山上三右衛門尉、波賀彦十郎二騎は、其の所の案内をよく存たる故にや、さかひを一町程乗過ごし、高き所へ乗上る。敵の草これを見、蜂の如くおこつて、二騎の武者を取まきぬれば、網にかゝる魚の如し。(下略)

右の次第で忍目附、若しくは忍の者と呼ばれる所の忍術者の需用の程度と、其の範圍とは、戰國時代の歴史の進み行くに隨ひ、愈々高く益々廣くなつた譯であるが、なほ、假りに俗説を土臺として其の時代を見ると、蜂須賀小六の手下となつて、切取強盜武士の常との主張の下に行動する、所謂野武士の下働をしてゐた時の、少年の太閤秀吉も、頗る伶俐に此の忍術を心得てゐたものらしく、隨つて小六の黨中に於ては、最も重要な題目として忍術が研究された事

と覺えられる。なほ又それから延いて、一般の野武士連に此の忍術の研究が重要せられた情状も、大概推測せられる様である。これに就いて又一つの引例をするが、正徳年間の出版に係る「近代正説碎玉話」と云ふ書物に、

正親町院の御宇に、王威日に衰へ、諸侯各其國に據て、天子の命を不用、遞に彼は此を併吞せんとす。美濃、尾張の間、盜賊殊に甚し。是れ剽殺を以て事とし、徒に財を貪るのみにあらず、此に依つて人の剛柔を試ると云ふ風俗なれば、盜賊等其黨を相率て、村里を掠め、女童を掠すに、ある草廬に到て、竊に内の體を覗へば、一婦人の粥を煮るあり、其粥の熟したるや否やを試るに、不食之著にて粥をはさみあげ、釜の蓋に置いて、指を以て之を押す。未熟と云て、又烹之。盜賊等見之、其禮儀人知ざれども猶亂ぬことを感じて、不敢侵掠となん。又一廬に至る。媼女の聲にて、今夜は雨あらく風烈し、盜賊あるべし。汝等いざとくして、怠ることなか

れ。槍の鞘をはづせよ、弓に弦かけよ、此鍋はよく透るぞとて、投出す音あり。壁のすき間より見之ば、絹を張の具なり、廬中を覗ふに、媼女と婢一人との外は、寂として人なし。盜賊等其謀ありて貞者にあらざる事を感じて、兵刃を不加して去ると云傳へり。

とあるのは、如何にも其の當時の世態人情が窺はれる様である。此の如く盜賊横行し乍らも、所謂切取強盜武士の常と云ふ主張に依つて、行はれる所の盜賊であるから、何處かに武士道の様なものを存し、唯だの泥棒と異つた節が認められるのである。此の輩が、密偵潜行の忍術に達してゐる所から、諸大名も喜んでそれ等を忍目附に採用した譯で、當時群雄割據の世に於ては、大名と云つても矢張り切取主義で、盜賊も亦切取主義、唯だそれに大小の差別があるだけて、武士にも盜賊の氣があり、盜賊にも亦武士の魂があつたから、大名が盜賊を忍目附に採用したのも、時代に適した風として、決して怪しむに足るべ

き事とは認められなかつた次第である、だから、蜂須賀小六及び其の類の野武士の如きも、最初土地や城郭を持つてゐなかつた爲に、先づ盜賊と認められたが、元來は天下に志を懐いて、機會を窺ひ大いに爲すべく、黨を養ひ、軍用金を蓄へることを努めたものと、云へば云はれない事が無く、遂には秀吉に用ゐられて、適れ其の片腕となり、功成つて立派な大諸侯に立身もした譯である。秀吉が洲の股に城砦を築き、信長の爲に美濃を取るの素地を作つたのも、大部分は、好く蜂須賀の一派を用ゐた効果で、密偵潜行の術に乘じ、險隘を行くこと平地の如く、暗夜もなほ白晝に齊しき働きをなす所の、是等の忍術者の野武士の一團は、普通の武士に依つて組織された軍隊よりは、餘計實際の役に立つた事と覺えられる。

伊賀流の忍術者に百地三太夫と云ふ者があり、其の弟子には出藍の譽ある石川五右衛門を出だし、又、豊臣秀次の股肱で、石川五右衛門と親交があつた木村

常陸介も、忍術の達人と聞こえてゐる。真田幸村も、好く忍術者を用ひ、且つ自身忍術者の任務を行ひ、家康を狙ひ撃たうとして、茶臼山の陣中に忍び入つた事がある。加之、甲賀衆、伊賀衆が、忍術者として諸侯に好んで用ゐられ、それから次第に、甲賀流、伊賀流と云ふ忍術の流名を生ずるに及んだ事情は、既に前回に述べた通りで、徳川時代の太平の世となつては、それ等が主に、將軍及び親藩から、諸侯の内情を探る探偵の役を勤めさせられる事となり、又、諸侯互に其の秘密を探り合ふ用に供せられ、大名が其の臣下の隠事を發くにも用ひられるに及んだ。水戸黄門光圀が、越後家の内情を探る爲に、高祿を取る近臣を手討の形にして姿を晦ませたが、其の武士は越後へ赴いて植木屋の弟子となり、首尾好く役目を仕了せて、隠事を發くべく重要な物件を手に入れた事は、越後騒動の記録に依つて世に傳へられ、その他、此の類の例は、徳川時代に於て少からずあつた様である。忍術を本職とする身分賤しき者にも、仙臺の菅野

小助の様な名譽の者があつた。

扱て、徳川時代になつて、忍術者の頗る面目を改めた點は、太平の秩序立つた世の中に於ては、戰國時代の様に、武士と盜賊との區別明らかでない様な事は許されず、武士は武士で、決して微塵も盜賊趣味を帶んではならぬのである故に、既う、切取強盜武士の常と云ふ主張は通じなくなり、盜賊を行ふ者は、縱令些の罪でも、必ず嚴罰に行はれると云ふ事になつたので、諸侯に用ゐられる忍術者も、亦時勢に連れられて、己れ等の態度を明かにしなければならぬくなり、其の爲に彼等は、其の後繼者及び門弟子に教へるにも、他人に向つて忍術の何物なるかを告げるにも、先づ第一に、忍術と盜賊術との別を説くに力瘤を入れる様になつた。随つて、忍術其の物の教へ方、段々組織的にされ、論理的にされ、有意義にされ、上品にされて、戰國時代の混沌たるそれに比べると、餘程形體の明らかなものとなり、終には、種々の傳書も作られ、「正忍記」

の様な勿體らしい本も出來た次第である。

されば、徳川時代の忍術者が、己れ等と盜賊との區別を立てた言葉に、左の二項がある。

◎忍者の事 これは常に事に倦まず、晝夜を別たず忍ぶ者也。盜人と其の品同じ。然れども、忍者は物を取らぬもの也、行き難き所も能く忍ぶ、道無けれども能く歸る。是れ名人の忍也。

◎盜人の事 これは心不敵にして、物の分ちをも知らず、先の難儀をも辨へず。たとへば鹿を逐ふ獵師の山を見ずと云ふ如く、物を取る所に於て身を亡ぼす也。拙きこと勝て言ふべからず。

以上は、「正忍記」に説く所で、言葉は足らず、文字は適切でないけれども、「忍者は物を取らぬもの也」の一句に、言外の意味があることを看取し得られるであらうと思はれる。なほ、伊賀流の忍術者百地三太夫の語として傳へら

れる所に依ると、

忍術は私欲の爲に行ふべきものにあらず。國家の爲、主君の爲。又は、一身の危難逃る、所無きに及んで、已むを得ずして行ふものなり。若し、私欲の爲に好んで、行ふに及べば、其の術必ず破るべし。

とある。これと、「正忍記」に所謂「忍者は物を取らぬもの也」とある一句とを、對照して見ると、忍術者と盜賊との差違即ち明かに、同時に、忍術者が己れ等と盜賊との混同を免れる爲に苦心した痕をも、窺ひ得るであらう。

斯くて、徳川時代に於ても、忍術は秘密の中に益々盛にされたので、其の益々技術的になつた徴には、天明年代の俳人與謝蕪村（今を距ること約一百三十年前）の句にも、

甲賀衆の忍びの賭や夜半の秋

といふのがあつた。これは、甲賀衆の忍術者達が集まつて、何處か至難な場所へ

忍込んで、これぞと云ふ印の物でも持つて來様との、賭をした事の、始終の光景を想像に描き、それが如何にも、肅殺の氣人に迫る様な秋の夜更の趣に適應するを覺えるとの、感じを表した句である。

又現今東京市麻布區筈町、即ち寺内現首相の邸宅のあるあたりの町名は、元來其の地にある筈橋と云ふ小さい橋の名から取つたもので、而も、筈橋は甲賀伊賀橋の轉化、其の又甲賀伊賀橋の名の起りはと問へば、幕府の初の頃には、其處は草深い谷際の地で、小川に架かつか小さい橋を中に挟み、其の兩方へ屋敷を興へて、甲賀衆と伊賀衆とを別れて住まはせた名残だと云ふ事である。

扱て、それ等の忍術者達も、仕舞ひには怎うなつたかと云ふと、明治維新の後に及んでは、是等の者を抱える諸侯が無くなつたと共に、忍術者の痕跡も自然に磨滅し、而も、其の中の或者は、警察方面に吸收されて探偵の用を爲し、以

忍術に對する誤解を正す

て其の系統を變形しながらに傳へてゐる事實がある。

私は、少年時代に或る東北の山寺で、以前は忍術者として某大名に仕へた者であるといふ雲水の老僧を見たことがある。私が忍術に就いての概念を得たのは、要り其の老僧に話して聞かされもし、行つて見せられた結果なのであるが、忍術の實驗の話は後の章に譲る事として、こゝに私が甚だ驚いたのは、忍術者と云ふものは、心の訓練が無論第一であるが、身體も此の通り強健でさうして輕捷を極めなければならぬと云つて、殆んど人間業と覺えられない目覺しい運動を見せて呉れた事である。

其の忍術者上がりの老僧は、山寺の本堂の圓柱へ、手を掛けずに登つて見せうと云ふのである。圓柱は直徑三尺ばかりあつて、本式に普請をした寺の事であるから、天井迄は餘程遠いのである。怎うして、其の滑々した樗造りの圓柱へ手を掛けずに登るのであらうと、不思議に堪へぬ思ひを以て



注視すると、老僧は、鼠木綿の裾短な着物に墨染の腰法衣を着け、件の圓柱を距ること約四間ばかりの位置から、丁度徒歩競走をする時の様な身構を以て、や、暫く圓柱を睨み着けてゐたが、懸て、其の底光りのする眼が物凄く輝き出だし、一文字に結んだ口は、更に、「へ」の字に引締つて、小縮まりに縮まつた身體を、筋金が入つた様にシヤチコぶらせたと思ふと、疾風の如しと云はんか、砲丸の如しと云はんか、殆んど形容し難い勢ひと疾さを以て、圓柱を望んで真直に駆け出した。其の勢ひで圓柱へ打突かつたら、骨も肉も、粉碎に碎けて飛ぶだらうと思はれる程であつた。然るに、思はず看る者をして呀と聲を放たしめたのは、どしんと圓柱へ打突かつたかと思ひの外、垂直な圓柱の面に足を掛けて、丁度「レ」の字の刎ねた所の様に、身を斜に立て、目にも止まらぬ速さを以て、一氣に圓柱を登り始めたのである。あれよくと指す中に、早や天井が近くなつたので、怎う

するかと更に目を睨ると、「え、ッ!!」と鋼を裂く様な一聲の氣合と共に、身を翻して、どんと兩足で天井を蹴ると其の儘、猫の様に身を圓くして落ちて來、疊の上に着くと、ぱつと手脚を開いて、平身の構へに立つた。これは、昔話でもなく、又人傳てに聞いた噂でもなく、確かに私が實見した事なのである。而も、これは何か特種の術があるのかと問いたたら、老僧は軽く笑つて、何の、術も不思議もある譯ではなく、唯、生來恁ういふ事に適した強健で且つ軽捷な體質のを、更に十分に訓練して、四肢五體に弾力と靱力とを張り満たせた結果であると答へた。さうして、之を行ふ時には最初柱を睨んだ時に、ぐツと息を詰めて、其の儘、即ち呼吸を停止した儘の一氣に、平面の所をも垂直の所をも、同じ一線の駆け場と見做して、柱の盡きる所迄駆け抜き、餘る力で天井を蹴ると共に、始めてそこで息を継ぎ、緩りした氣持を以て落ちて來るのであると云つた。而も、忍術者と

忍術に對する誤解を正す

云ふものは、これぐらひに身體を鍛錬した上でなければ、實際物の役に立つものでないと云ふのである。

へ 忍術と云ふもの、概念と其の研究方の大要

忍術とは怎麼ものであるかとの問ひに對して、十分の解答を與へるには、百千言を費してまなほ足るまいと思はれもするし、又、以上述べ來つた所の大要を總括すると、そこに忍術といふもの、概念が浮び來るであらうとも思はれるが、併し、愈々忍術其の物の研究に入る前、今一度改めて忍術の定義を述べ、なほそれに就いての概念を傳へることは、研究者の便益の爲に、當然私の取らなければならぬ態度であらうと思はれる。

先づ一口に忍術なるものへ定義を下すと、偵察密行の目的の爲に身心兩面を訓練する所の、諸般の方法の總稱であると云ふ事が出來やう。さうして、其の練習すべく研究すべき題目の數量は頗る多く、其の範圍も亦隨分に廣いのであるが、大略これを

(一) 頭腦の方面

(二) 技術の方面

の二つに別けて見ることが出来るのである。扱て其の頭腦の方面に於て、研究すべく練習すべき諸科目は、

(一) 氣象

(二) 地理

(三) 算數

(四) 醫藥

(五) 動植物

(六) 飲食品

(七) 言語

忍術に對する誤解を正す

(八) 文字

(九) 武器其の他の器械

(十) 交通機關

等に關する一般の智識を吸收する事。なほ又今日に於ては、此の外、

(イ) 物理

(ロ) 化學

等の科目を加へなければならぬ事が勿論であるが、それから、

(十一) 政治の概念

(十二) 法律の概念

(十三) 觀相術

(十四) 讀心術

(十五) 人情風俗の鑑別

(十六) 水陸の道路、建築物、橋梁、船舶等の鑑別

(十七) 種々なる物品器具の鑑別

(十八) 人を謀る驅引

(十九) 臨機應變の心意の訓練

(二十) 密偵に要する一種の自己催眠術

等、算へ來れば、随分其の科目が少くはないのである。

次に、技術の研究練習となると、なほ其の科目が多く、随つて其の範圍も亦廣くなるのであるが、其の大要を述べると、

(一) 劍術

(二) 居合

(三) 白打捕物

(四) 砲術(殊に短銃)

忍術に對する誤解を正す

- (五) 水馬水練
- (六) 忍術に要する物品器具の取扱ひ
- (七) 變裝術
- (八) 隱身術(五遁の術)
- (九) 催眠術
- (十) 氣合術
- (十一) 飛躍術
- (十二) 攀登術
- (十三) 速歩術
- (十四) 潜伏術
- (十五) 斷食法
- (十六) 不眠法

- (十七) 睡眠調節法
- (十八) 簡易療法(別けて負傷挫折に對する)
- (十九) 諸國の方言の真似
- (二十) 鳥獸の鳴聲の真似
- (二十一) 虛實轉換の術

等は、是非共必要缺くべからざるものである。

扱て又斯様に頭腦と技術との兩面共に、研究すべく練習すべき科目が頗る多く、同時に、それ等を研究し盡し練習し抜くことだけでも、容易の業でないのであるが、更に、其の研究練習だけが一通りに出来たとて、それを實地に應用する段となれば、又々困難なる問題に出ツ會はさなければならぬのであるから、古から、忍術の専門家に於ては、これが研究生たるべき候補者を選ぶに入笠しかつたものである。即ち、忍術研究の候補生として合格するには、左の二要

素を備へた者でなければならぬとされてある。

(一) 心的要素——機敏、沈着。

(二) 身的要素——強健、輕捷。

先づ、心的要素の方から云ふと、無論、薄益槍では忍術者にはなれぬが、左りとて、「ぢやん」と云へば直ぐ驅け出す様な御先者でも亦困る。即ち、機敏にして而も沈着と云ふ、一見抵觸する様な、兩極端の長所を一つに併せて持つてゐなければならぬのである。それから身的要素の方も亦之と同じ理で、身體の丈夫な者は、大抵肉が多く目片が重くつて、牛の様に鈍々する傾きがあり、怎うも、猿の様に身軽く立廻ると云ふ譯には行き難い。併し、これでは忍術者として駄目であるから、強健にして而も輕捷、前回に擧げた老僧の様に成り得べき素質を持つて、驅足でも、高飛でも、幅飛でも、すべて人一倍に出来る運動家でなければ、忍術を教へられないのである。

(二) 忍術の形體的方面

イ 研究上の便宜より別ちたる忍術の二方面

前にも述べた通り、眞誠に忍術者となるには、身的方面及び心的方面の二つ共に、別誂の卓絶したものを持つてゐなければならぬのであるが、併し、人それぞれに或度迄、之を研究し之を練習して、相應の効果を收め、且つ、効果に伴ふ興味を覺える事なら、誰でも何人でも出来るのであるから、之を講述することも、亦肯て無益の業ではあるまい。

そこで愈々、肝腎の問題たる忍術の研究に入るのであるが、之を研究するには、

(一) 忍術の形體的方面

(二) 忍術の心意的方面

と二つに別けた方が便宜である。即ち、兩面共に讀んで其の字の如く、

形體的方面は、主として、身體の行動と器具物品、及び、天然の物象、種種の生物などの使用と相俟つて行はるべき、實際の技術の方面。
 心意的方面は、主として、訓練された頭腦に依つて、事を測ると共に事を工み、及び、訓練された言語と表情とに依つて、人を探ると共に人を釣るべき、無形の能力の方面。

なのである。而もこれは、何方が大切で、何方が大切でないといふことがなく、何方が高く、何方が低いと云ふこともないので、形體と心意との兩方面の研究練習を十分にして、始めて眞誠の忍術者たることを得る譯で、而も、形體的方面の中にも心意的方面があり、又、心意的方面の中にも形體的方面があるのであるが、それでも強いて別けて云ふと、心意の方面には忍術以外の道と共通の事が少くないのに、形體的方面だけは全然特殊的で、忍術に限つた方法が多く、又忍術以外の道に應用し得べき方法であつても、元來が忍術の爲に編み出され

たものであるから、これに忍術の特殊の性質と色彩とが見出だされるのである。其の爲に私は、心意的方面よりも形體的方面を先に立て、講述することにしたのであるが、先づ青龍軒名取兵左衛門が「正忍記」に述べた所を材料として、所々にそれより一步を進めた秘訣を挾み、即ち傳書にも記してない蘊奥を傾けた上、更に進んでは、「正忍記」にも他の傳書にも無い五道の術を讀者に傳へ様と思ふ。

ロ 忍術の七方出（變裝術及び變相術）

先づ、忍術を行ふに臨んでの、忍術者の持物と、其の打扮とに就いて述べるのが順序であらうと思はれる。名取青龍軒の「正忍記」に依ると、
 凡そ忍と云ふは、其の人の知れざるを本とす。故に、出立つ形をまぎらはする様也。古の能く忍ぶものは、父子兄弟たりと云へども、此者を見分くる事無し。

とある、即ち忍術者にならうとする者が先づ第一に講ずるのは變相術、變装術の類で、これは、忍術者として最初の研究であると共に、又最後迄の研究なのである。そこで、古の忍術者は、忍術の六具に七方出と云つて、變装と、それから、變装と相伴ふべき持物との事を、先づ忍術の入門として研究したものである。六具は即ち忍術に必要な六種の持物、七方出は忍術者の變装の七種である。元來、變装が先に立つて、持物即ち携帶品を後にすべきであるが、呼び方の語路がいゝ爲に、『六具七方出』と一口に云ふ様な習慣を爲したのである。

故に、正當の順序に依つて、先づ七方出の問題から着手仕様が、古の忍術者は、其の慣用する變装術を七つに別けて、

虛無僧、出家、山伏、商人、放下師、猿樂、常の形

としてある。此の中、虛無僧、出家、山伏、商人は、別段解釋を用ゐぬが、放下師とは、今日で云ふ手品使ひ、輕技師、又猿樂とは今日の俳優に當るものである。

ある。

虛無僧は天蓋を深く冠つて面を掩ひ、且つ、着衣は勿論、手甲、脚絆に到る迄、すべて特別の物を用ゐる上、一種の治外法權然たるものを持ち、却々權式張つて、濫りに之に手を附けられぬのであるから、徳川時代に於ては、世を忍ぶ身の者が虛無僧寺に逃れたり、又、敵讐などを捜す者が、之に打扮つて、尺八を吹き人家の様子を窺ひ歩くことを便宜としたもので、川柳にも、

御無用と氣味悪く云ふ仇持ち

と云ふ句があるくらいである。實に、忍術の變装には持つて來いのものである。出家も、全然普通人と異つた打扮で、又人家を窺ひ、世上の風聞などを探るに、便宜の多いものであるから、是も亦忍術の變装として重要であるが、併し、虛無僧の様に權式振つて威張ることは出來ず。又虛無僧は腕立てをするのが尋常であるが、出家はそれも出來ぬ困難がある。且つ、出家に打扮つには、頭を

剃るか、左無くば頭を包み隠すかの苦心が必要であるから、古への丁髷時代にはどうも都合が悪い。であるから、古へに於ては、出家の變装は萬已むを得ずして爲すものとされてある。俗傳にある所の、秀吉が四方田但馬守の要撃を避けて、田舎の寺に入り、風呂場で頭を剃り、俄出來の味噌搦り坊主に化けたと云ふのは、此の例に擧ぐべきであらう。

山伏、これは、虚無僧に比べて、更に物々しき嚴めしいもの、而も、内容外觀共に極めて特殊のものである上、必ずしも頭を剃り圓める必要があるのではなく、切り下げ髪でも構はず、場合に依つては、怎麼に威張つてもいゝし、又腕立てしても怪しまれぬから、これも、虚無僧と同じく忍術者に都合のいゝ變装であつて、唯だ、虚無僧は市井的、山伏は山林的と、各々其の赴く所の方面を異にしてゐるだけである。義經が辨慶以下の股肱と共に山伏に變装し、北陸から奥州へ落ちたのは、誰も知る話で、南北朝時代には、護良親王が村上義光等

と矢張り山伏に變装し、十津川へ落ちた事實がある。楠正成へ後醍醐天皇の密旨を傳へたのも、山伏姿に打扮した公卿であつたのである。

商人に打扮つて、行商をしながら、他國の領分へ入り、探偵を行ふことは、殊に、徳川時代の忍術者に使用せられたもので、これは一寸世才に長けた小器用な者には、譯も無く出來る事である。

放下師即ち手品使ひ輕技師になつて、藝當を遣り乍ら、忍術の役目を行つて歩くことは、人々の興味を唆つて現を抜かさせる所に、大いなる便益があるのである。但し、これには特別の技術を要することが勿論であるが、元來忍術なるものは、頭腦が機敏で身體の輕捷な人間の爲る事であるから、忍術者たるに適する人間ならば、多くの場合に於て、亦手品使ひ輕技師たるにも適する筈である。

猿樂即ち今日の俳優に當る者に打扮つて、旅を興行して歩く間に、忍術者と

しての密偵の役目を行ふ。これも多大の便宜がなければならぬのである。それに、忍術者なるものは、手品使い、輕技師たるに適する如く、亦俳優たるにも適すべき筈で、忍術者は、多くの場合に於て演劇をしなければならぬ。即席の演劇が出来ぬ忍術者は、上乘の忍術者ではないのである。なほ、此の猿樂と云ふものと「猿廻し」とは、全く別物であるが、猿廻しに打扮つことも、忍術者として頗る便宜な方法であることを、こゝに附記して置きたい。

最後に、七方出の一つに算へられる「常の形」と云ふは、一見餘計な事を加へた様にも覺えられるが、其の實これには、不盡の妙味があるのである。

變裝の極は常形に在り。

てふ一語こそ、實に至極の名言なので、何物にも打扮せず、本來在るべき通りの自分の常の形の儘で忍術を行ふのが、より自然に、より斧鑿の痕が無く、却つて多大の成績を擧げる場合があると云ふ意味である。

以上は、古への忍術に於ける變裝の主なる種類で、其の外、特殊の場合に於ける特殊の變裝、即ち貴人若しくは賤人に打扮つたり、或る任務、或る職業の者に打扮つたり、老人に打扮つたり、少年に打扮つたり、男が女に化けたり、女が男に化けたり、或は或る特殊の氣味色彩を有つた地方人に打扮つたりすることがある。理窟は一つであるが、今日に於ては、更に種々の變裝の道があり、又變裝の術も、古へよはずつと進歩してゐるので、之を忍術に應用して、古へよりは更に便宜であらねばならぬのである。

扱て、變裝術を行ふに就いては、必然に、之に伴ふ變相術が無ければならぬのであるが、古に於ては、忍術者に顔の色を塗り變へる方法が教へられてゐる。それには、

白い物を土臺とする場合。
黒い物を土臺とする場合。

の二つあり、而して、

前者に於ては、薄白粉に、黃柏、朱、黃土などを交ぜる事。

後者に於ては、薄墨に、白粉などを交ぜる事。

などであるが、怎うしても、古の變相術は幼稚なるを免れないので、今日の變相術はずつと進歩してゐるから、随つて、變相術を借用する所の忍術も、今日に於ては數段の進歩を見なければならぬのである。

それから、古の忍術者は、以上の顔の色を塗り變へる方法と相俟つて、驚くべき克己を取てし、以て我が外觀を變化せしむるに努めたものである。即ち、身を勞し、食を減じて、容姿を變ぜしむる事。

である。物を少く食つて、身を多く働かせ、それに依つて、形容を枯稿に、顔色を憔悴せしむるのである。これは随分酷い變相術である。併し、病と稱し人を欺く時などに、寒中寒い思ひをして、顔を青く、唇を紫にし、又暑中に

厚い夜着を被つて、全身から湯氣を立て、息も詰まるばかりな苦みを爲すは、古の人が能く取つた方法で、筒井順慶が、此の後の方法に依つて、明智の使者を欺いた事は、戰國時代の一逸話なのである。

ハ 變裝術及び變相術に伴ふ諸種の重要なる研究

扱て、變裝術及び變相術が旨く出來たからとて、内容がそれと相伴はなければ、却つて人に怪しまれて、真相を看破せらるゝ本となり、結局爲さるゝに如かざるの悔を残すに到る虞があるから、之を行ふと共に重要なる諸種の研究は、

- (一) 份装に伴ふ特殊の智識の吸收と特殊の技術を練習する事。
- (二) 己れが扮装する者に特殊の生活、習慣、言語等に練熟する事。
- (三) 其の扮装する所の地方人に特殊の言語、風俗等を研究實驗する事。

の大要三條である。譬へば、虛無僧ならば第一に尺八を吹くことを知らなければならぬし、それから、虛無僧の儀式、作法、其の挨拶の言葉に熟さなければならぬし、それから、虛無僧の儀式、作法、其の挨拶の言葉に熟さなければならぬし、それから、

ばならないし、山伏ならば、經文呪文の唱へ方、其の持ち物の取扱ひ方などを知らなければならぬ。商人には商人の道があり、言葉があり、別けて、其の商品に關するすべての事に通じてゐなければならぬ。又手品使ひ、輕技師、俳優などになると、それ／＼の技藝を能くする上、其の社會に限つた通用語、日常の特殊な生活振りなどを本職の者と同様に心得てゐなければならぬ。地方の方言、其の人情風俗を體得することは、容易に似て更に困難である。(就中忍術では「奪口の反」と稱して、地方々々の方言を真似ることを重んじてゐる。貴人に扮したら些末の事迄も貴人らしく、乞食に扮したら些末の事迄も乞食らしくなければならぬ。

何でも、其の本職の者、其の地位階級の者、其の地方の者が見ても、少しも疑はずに、己れと同じ側に在る者と信ずる様でなければ、却つて、爲さるるに如かざるの結果を來すのであるから、此の段の研究練習は實に至難の事業であ

る、日清戦争の際、支那人に扮して彼地に入り込んだ軍事探偵の中、鐘崎三郎であつたか誰であつたか忘れたが、支那の官憲に怪しまれ掛かつて、早速の頓智を出し、支那人に相違無いと思はせる爲に、至極皮肉に支那的習慣の燒點を捉へて、怪む者の前で野糞を垂れることを敢てした、これは確に觀面の効果があつて、即時に嫌疑を免れたのは好かつたが、唯だ一つの遠算は、支那人としてはあるべからざる、文字を書いた紙で尻を拭いた事である。それで早速擬支那人と看破されて、むざ／＼と捕縛され、とう／＼生命を取られて了つた。固より生命を惜まずに掛かつた仕事であるとは云ひ乍ら、これ程迄に旨く仕了ふせた末、ほんの些かの不注意から大事を誤つたのは、如何にも残念至極の事である。實に、忍術の至難な點はこゝに在るのである。

但し、此の段の研究は、忍術に於て心意的方面の部に屬するのであるが、併し、實際は形體的方面の變裝術及び變相術に相俟つて離れぬものであるから、

こゝに之を述べたのである。

二 忍術の六具

既に變裝術の七方出を述べたから、今度は七方出に伴ふ忍術者の六具の何物なるかを説かなければならぬ。

編笠、鈎繩、石筆、藥、三尺手拭、打竹。

の六つが、即ち忍術者が普通に身に帯ぶる所の必要具なのである。

其中編笠は、面を掩ふ必要の物であるが、打扮に依つては、或は天蓋、或は菅笠、若しくは塗笠など、編笠に代るべき適宜のものを用ひなければならぬ。時としては笠の紐が大切で、これに密書を納むことができる。

鈎繩は、木の枝などに投げ掛けて、塀を乗り越え、石垣を攀ち登る等に用ゐる重要なもので、又、人を縛つたり、物を括つたりするに兼用するのである。但し、若し、身體検査を行はれる虞を犯さなければならぬ場合には、これを携へ

ると忍術者たることを自證するのであるから、時に依つて身に帯ぶることを控へなければならぬのである。

石筆、これは、今日の石盤へ書く爲の石筆とは異ひ、寧ろ黒板へ書く白墨に近いもので、要り石灰石の小さい棒である。其の用は、壁、柱、塀其の他へ目標を記す爲のもの、譬へば、夜間侵入すべき場所へ、晝間から目標を附け、己れ或は己れの仲間の便宜に供するのである。

藥は、應急のもので、氣附、劇藥、崩帶の類を普通とし、たまには、劇藥、毒藥の類を携帶することもある。

三尺手拭、これは刀と共に、忍術者に特殊の用があるもので、其の染色から、其の携帶の仕方に到る迄、盡く秘傳ものであるから、次の「ホ」の條に於て詳しく之を説くことにする。

打竹、これは今日の懷爐の様なもので、火を用ゐる場合の爲に携帶するので

ある。今日の様に燐寸があり、又耐風燐寸の様なものもある世の中には、何も懐爐に近いものを持つて歩く必要が無い譯である。

變装術及び變相術も、今日に於ては、いくらも進歩した方法があると同じく、忍術者の携帶品と雖も、必ずしも以上の六具に拘泥するの必要は無く、要するに、時代に適し、時宜に應ずる所の、然るべき持物を選択すればいゝのである。けれども、古への忍術者が特に此の六具を重んじたには、實驗上の根據があるのであるから、之を出發點として工夫を進めなければならぬ。

ホ 之を漏らせば忍術者に暗殺せらるゝを免れざる

至極の秘事

以上の六具七方出は、『正忍記』の本文を本として述べたのであるが、忍術者の持物と打扮とは、古へでも以上に止まつた譯ではなく、以上の外、特別の場合に於ける特別の持物（たとへば、目潰しの用として、鶏卵の殻の中へ蕃椒の

粉と灰とを混ぜたものを入れたもの。爆裂發火の用として、硫黄煙硝の類など）があり、特別の場合に於ける特別の打扮（例へば、高貴の人、乞食などに扮し、或は男子の身で女装するなど）もあるが、併し、それと別段秘奥と云ふべきではなく、要り、以上の六具七方出に基いた變化に過ぎぬのである。けれども、こゝに、忍術者の持物に就いて、『正忍記』の筆者も之を記すことをしなかつた秘中の秘事が二つある。而もそれは、若し、徳川時代でもあらうものなら、此の秘密を諸君に漏らした銀月は、直ぐに忍術者に暗殺されて了はなければならぬ程の、重要至極なものである。

一つは刀の事で、他の一つは手拭の事であるが、今日では、誰も私を殺す者も、談判に来る者もあるまいから、安心して秘密が漏らせる譯で、先づ刀の事から述べ様と思ふ。

忍術者に第一の特殊な持物は、其の腰に差す所の刀である。これは、狭い所



や、引つ掛かる物の多い所を潜つて歩いたり、そんな所で振り廻したりすべき場合の必要の爲に、先づ、中身の二尺に足らぬものを選ばなければならぬ。さうして、高い塀を乗り越えて忍び込む時に、其の刀を塀へ立て掛け、鐺へ足を掛けて身を高くする爲に、鐺其の物をば、普通よりや、大きめにし、草鞋の二らぬ様、鐺の面を滑らかでなくして置く必要がある。それと同時に、小尻の金具をば堅牢に、且つ、確と地面へ食ひ込んで動かぬ様に、拵へて置かなければならぬ。それから、最も口傳のあるのは其の下げ緒で、これは、刀を立て掛けて塀を越える足場にした時に、下げ緒の端を口に啣へて、首尾好く塀に登ると共に、口で刀を引き上げないと、刀を残し置かなければならぬから、即ち忍術者の刀の下げ緒は普通より餘程長くなければならぬ。而も、其の人々の身の長や身體の具合に随ひ、それ〴〵都合のいい様な寸法にするのである。これは、今日實地に忍術を研究する人に對しては、要の無い様な話ではあるが、併し、

忍術と云ふものは、恂う云ふ特殊のものであると云ふ事を吞込んで、一段忍術の深い所を窺ひ得た効果は、十分他の工夫に應用して利益があるべき筈である。なほ、刀の下緒の外に重要なるは手拭で、これは必ず三尺手拭に限り、而も其の携帯の仕方、細く折り横に帯の間へ挟み、帯と共に腰へ捲き着けるか、若しくは、襦袢の襟と見える様に、頭に掛けて胸に合はせるかするに限られてある。其の譯は、手拭が忍術者にとつて極めて重要である上、其の染色が特殊であるから、第一、人目に立たない様に、それから、怎麼に立働いても落して失ふ様な事の無い様に、同時に又、容易く取出すことの出来る様にと、苦心實驗の末に定めた持ち方なのであるが、何故に手拭が斯く大切であるかの理由に就いては、極の秘事であるから、『正忍記』にも、其の他一般の傳書にも説いてない。

そこで、手拭に就いての秘事を漏らすには、第一、手拭其の物の染色が何で

あるかを語らなければならぬ。それは、かのどす黒い程に赤い所の蘇枋染めなのである。扱て、何故に忍術者は蘇枋染めの手拭を用ゐるかとなれば、これは、忍びの際に頭を包む用として是非缺くべからざるもので、人間は暗中に身體を隠しても、頭部だけが怎うも目に立ち易い。此の際、黒い物で頭を包んだら好さうなものであるが、實驗上、黒い物よりも、濃く赤黒い色の蘇枋染めが、一段好く闇の色と同化するから、頭を包むにはこれが最上なのである。蘇枋染めの手拭で頭を包んで、暗中に潜んだ以上、縦令必要上彼方此方へ頭を揺り廻したとて、怎麼炯眼の者にも認められる虞が無いとしてある。但し、着物も蘇枋染めにしたなら、尙ほ好からうと云ふ人があるかも知れぬが、暗中に潜む時他の場合に人目を引くから、それはいけないので、其の代り、忍術者の着衣には、差支の無い限り、茶染、ぬめりがき、黒色、紺、花色等、成るべく暗中に目立たぬものを用ひ、帯も黒色丸ぐけの端無い輪帯を用ゐる事になつてゐる。

今一つ、蘇枋染めの手拭の重要な理由がある。それは、忍術者が追手と奮闘して危急を免れた場合。若しくは、精根の續く限り疾走して追手の及ばぬ範圍に逃れた場合。さうでなくとも、非常に活動した場合などで、咽喉が渴いて堪まらぬことが、多くあるものと思はなければならぬ。而も大概は暗夜の事であるから、幸に清水を求め得られる場合は滅多に無く、大概は、清濁汚潔の差別の判らぬ水を飲まなければならぬのみならず、甚だしきに至つては、溜り水でも、溝の水でも、避けておられないことがあるだらう。けれども、此の際蘇枋染めの手拭を開いて、水の上に浮べ、手拭越しに水を吸ふ時は、單に塵芥が口へ入らないのみならず、汚水の毒を防いで胃腸を保護する力が、染料の蘇枋其の物にあると云ふのである。

へ 忍術に於ける特殊の歩き方

忍術の形體方面を説き去つて、これから、忍術の骨體眼目たる隱身遁形の術

を述ぶる段に移らうとするに臨み、こゝに又、忍術秘傳の一つで、「正忍記」にも他の傳書にも無い所の、特殊の歩き方を諸君に傳授致さうと思ふ。

これは唯、尋常に歩く所の方法で、普通一般の歩き方と異なる所は、其の足の進め方にあり、而も、足の進め方一つで、此の歩き方の三步が普通の歩き方の五歩に匹敵するから、普通の歩き方で一日に十里の路が行かれるとすれば、此の方法に依る時は、同じ勞力で十六里強の路が行かれる事となる。又、此の歩き方に依ると、普通の歩き方では可けない狭い所をも、するゝと通り抜けられるのである。だから、獨りこれは忍術を行ふ上に於て重要であるのみならず、一般人がこれを練習すると、驅け足を用ゐる事無く、特に疲勞しないで、多くの路を行くことが出来る。

其の方法は他でもなく、普通の前に向つて足を踏出す事の代りに、目的の方向に對して身體を横向きにし、股を開いて、蟹の様に横歩みをするのである。



第一圖



第二圖

先づ右の足から進めるとして、普通の直立の姿勢から、股を踏み開いた形（第一圖）に變ずる。次には、左の足をぐツと進めて、右の足を越し、丁度X字形に足をぶツちがへた形（第二圖）になる。さうして又、直ぐに右の足を進めて、第一圖の様に股を踏み開く。恁麼風で、最初は一寸遣り悪い様であるが、少し慣れると容易く出来る様になるのである。一日に三十里行くの四十里行くのと

云ふ昔の人は、要り此の方法を十分に練習し抜いた結果なのである。

忍術者は、場合に依つては、必要上驅け足もするのであるが、普通の場合に驅け足をするにも及ぶまじく、又忍びの時に驅け足は、却つて禁物としなければならぬけれども、左りとて、尋常の様に鈍く歩いては用が捗らぬから、此の歩き方は、忍術者にとつて極めて必要である。なほ此の方法に依れば、狭い隙間を巧に通じ抜けることも出来るし、又、壁や羽目を傳つて人目を避けつゝ進退する事も出来るから、怎うしても、忍術の歩き方にはこれではなければならぬ譯である。今日活動寫真や何ぞで、忍術々々と騒いでゐるに拘らず、此の歩き方の事さへも知らぬと見えて、何處の誰も傳へてゐる者が無いとは、氣の毒過ぎて却つて可笑しくならなければならぬ。

それに附けても、私に忍術研究の最初の手解きをして呉れられた、越後長岡の谷村伊八郎氏が、此の忍術の歩き方を教へられたことを多謝するのである。

(三) 忍術の形體的方面に於て秘奥の部に
屬せる五遁の術

イ 表五遁と裏五遁との十法及び三遁の術

隱身遁形の術は、忍術に於ても最も秘奥の部に屬するものであつて、何の傳書にも決してそれを述べてなく、唯だ口傳を以て入室の弟子に教へ、必ず人に漏らすまいと誓はしめたものである。尤も形を隠して人に知られない様にするのが、忍術に於て究極とする所で、既に隱身遁形が出来る以上、怎麼所へでも忍び込んで、怎麼業でも出来ないことは無い筈である。

さうして、隱身遁形の術の正統は、支那傳來の五遁の術であつて、即ち五行に象つた所の、

木遁、火遁、土遁、金遁、水遁。

の五つであるが、なほ又、これを表五遁と呼んで、表五遁に對する裏五遁の、

人遁、禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁。

と云ふのがある。更に進んでは、此の表裏併せての十遁の術を土臺に、それからなほも工夫を進め、類別を改めた所の、天地人三遁の術と云ふものがある。即ち、

天遁、地道、人遁。

の三つである。併し、これも細に分解して見ることになる、以上の中の地道は、表五遁を總括したものに外ならないので。又人遁は、裏五遁を總括したものの。唯だ天遁だけにのみ、五遁以外の創意が認められる。而も、天遁を分類すれば、

日遁、月遁、星遁、雲遁、霧遁、雷遁、電遁、風遁、雨遁、雪遁。
の十となり、地道を分類すれば、

忍術の形體的方面に於て秘奥の部に屬せる五遁の術

木遁、草遁、火遁、煙遁、土遁、屋遁、金遁、石遁、水遁、湯遁。
の十となり、人遁を分類すれば、

男遁、女遁、老遁、幼遁、貴遁、賤遁、禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁。

の十となるのである。

けれども、元來忍術に於ては、木火土金水の五遁の術が隱身遁形の法の根柢になつてゐるのであるから、これ等のすべてを總括して、一口に五遁の術と呼び習はしてゐる。尤も、萬法は一に歸すであつて、隱身遁形の術は、其の寓する物に依つて千差萬別ではあるけれども、歸する所の理は唯だ一つであるから、要まり何と呼んでもいゝ譯になるのである。

ロ 隱身遁形の術の基く所

隱身遁形の術と云へば、呪文でも唱へて、印でも結ぶと、忽ち、今迄其所にあつた姿が、掻き消す如く見えなくなる所の、神變不思議の術でもある様に

聞こえ、同時に、其の呪文の唱へ方と印の結び方とを覚えさへすれば、容易く形を隠すことが出来るものである様に思はれるが、實際そんな馬鹿々々しい事が出来る筈のもてない。

そんなら、隱身遁形の術と云ふものは、昔の人がいゝ加減の法螺を吹いたもので、實際出来るものでないかと云ふに、決して又さうなのではなく、それは、呪文だの結印だのに依らなくとも、正當の研究と練習とに依つて出来る事であるから、問題になるのである。不思議でない方法に依つて、不思議の事實を結果するから、味ひがあるのである。

要まり、隱身遁形の術の基く所は、何に在るかと言ふに、忍術に於ては、一に之を虚實轉換の法とも云ひ、兵法や劍法に於ける虚實の理と根源を齊しくし、實と見せるが虚で、虚と見せるが實

なのである。今一步を進めて精しく解説すると、或る場所に於て必然に在る物、

或は偶然に在る物、若しくは特に在らしめたる物に向つて、對者の目と心とを轉ぜしめ、語を強めて云へば、目と心とをそれに奪はれしめ、其の瞬間を利用して、極めて機敏なる頭腦の作用と、極めて輕捷なる身體の動作とに依り、神速に、對者の目と心との到らぬ範圍外に身を脱するのが、隱身遁形の術の眼目である。而もそれが、節に合し機に投じて旨く仕了せられた時には、人をして實に其の神變不思議に驚かしむることを得るのみならず、其の瞬間の利用の仕方に依つては、消極的には怎麼災難をも怎麼危險をも免れ、又積極的には、怎麼困難な事でも怎麼奇抜な事でも、易々と行ふことが出来るのである。殆んど奇蹟に齊しい事をも行ひ得るのである。單に護身術と見ても、實際忍術以上の護身術は無いのである。

次には、一々細目に就いて、五遁の術の表裏及び三遁の術の秘奥を語らうと思ふ。讀者も、其の積りて十分の注意を以て熟讀玩味して戴きたい。

ハ 木遁の術

先づ順序として、木火土金水の五行に象つた表五遁の術から説き始めるのであるが、これには、三遁の術の中の地道十法が含まれてゐるので、即ち、木遁の術の中には草遁のそれをも含み、火遁の術の中には煙遁のそれをも含み、土遁の術の中には屋遁のそれをも含み、金遁の術の中には石遁のそれをも含み、水遁の術の中には湯遁のそれをも含んでゐる。

最初には木遁の術を述べなければならぬ。木遁とは讀んで字の如く、即ち木及び草に依つて形を遁れ身を隠す術であるが、先づ一口に云ふと、木立や草原に依つて、日向と日蔭、若しくは燈火の面と燈火の影（月光の下と其の影とも之に同じ）との明暗の對照と變化とを利用し、一方に簇々と音を立て、若しくは、人が居る印の冠り物乃至衣服の端を見せ置き、人の目と心とをそれへ引いて置いて、却つて、他の一方の思ひも寄らぬ所へ身を隠すか、逃げ込むか、若

しくは進み出でるかするものは、此の木遁の術の普通である。かの『北條五代記』に「敵も味方も前手の役として、夜に入れば足輕共、さかひ目に行き草に臥して敵を窺ひ、曉には歸る。これを草とも忍とも名附たり。」とあるは、即ち此の木遁(三通の術に於ては、地遁十法の中の草遁の術)を利用したものである。

材木を積んである所、若しくは立て、ある所を利用し、不意にそれを押倒したり轉がしたりしたりし、人々の驚き慌てる間に素早く身を隠すのも、亦木遁の術の一つで、『吳越軍談』にある所の、路の草を結んで追手の軍馬を躓き倒れさせたと云ふのも、矢張り此の術の範圍である。林の中か、草の中に伏兵を置くのもそれで、『演義三國志』に、燕人張飛が僅か二十騎の兵に林の中を往來させて、敵の目に多勢と思はせたと云ふのも、此の木遁の術の中に算へることが出来るのである。恂う一口に云つて了つては何でも無い様であるが、忍術的に十分に

訓練された機敏な頭腦と、輕捷な身體とでなければ、却々、機に臨み變に應じて都合好く出来るものではない。

それから、此の五遁の術は、一つ宛單獨に行はれる場合よりも、其の中の二つ或は三つを兼ね行つて、功を奏する場合が多いのである。

假令ば、豫め、小禽か小さい獸、若しくは蛇の様なものを携へてゐて、自分分は深く大木の虚洞に匿れ、追手の者が、どうも此の虚洞の中が怪しいと云つて、灯を向けるか、或は棒の様な物を入れて探る時を見計らひ、不意にそれ等の動物を飛び出させるか、によろ／＼と這ひ出させるかする。そこで、恂慮ものが虚洞の中にある以上、是れ人の入つてゐない徴であると、追手が怪しみの念を棄て、他へ赴くとする。恂う云ふ場合には、それが小禽であつたら、木遁の術と禽遁の術とを共用したもので、小さい獸であつたら、木遁の術と獸遁の術とを共用したもの、又それが蛇であつたら、即ち、木遁の術と蟲遁の術と

を共用したものである。(忍術者は、好く、蛇だの、墓だの、又、鼠の様な小獸だのを携帶することがある。裏五遁の部で之を説く事にする)

又、林の中に枯葉を集めて、それに火を附け、煙や焰の揚るのを見て、人がそれに注意を引かれ、若しくはそれへ駆け寄る暇に、素早くそれと反対の方へ身を脱するのが、木遁の術と火遁の術とを共用したもの。大きな草原に火を放ち、敵或は追手の方へ其の焰煙を靡き掛からせ、之に乗じて敵を破るか、若しくは之に依つて身を逃れるかするもの、矢張り木遁の術と火遁の術とを共用したものである。即ち、駿河の國の野で、日本武尊を草の中に誘ひ、之に火を放つて、尊を亡ぼさうとした虜共は、偶然に木遁の術と火遁の術との共用法を行つたもので、之に對し、劍を抜いて草を薙ぎ、反對に火を放つて虜共を破つた日本武尊も、又同じく此の共用法を行つたものに外ならぬのである。

それから、手頃の石を林の中へ投げ込んで、枝や幹に觸れる其の響に、人の

注意を引き、自分は却つて林の無い方に身を脱するのは、木遁の術と金遁(三遁の術に於ける地道十法の石遁は、五遁の術に於て金遁に屬する。)の術とを共用したものである。

其の他、これ等の例に依つて種々に研究工夫したら、自然に發明する所があるであらう。何れにしても、機敏なる頭腦と、輕捷なる身體との、節を一にした作用を俟つて、始めて行はれる所のものである。

二 火遁の術

表五遁の中の第二に位する火遁の術は、三遁の術の中の地道十法に屬する、煙遁の術をも含むので、これは、忍術として、木遁の術よりは一際峻烈に、且つ割切に、應用の道も頗る多いのである。

それと云ふのも、要する所は、火と云ふものが極めて人の目を引き易く、人の注意を呼び易い爲に在るので、先づ火遁の術の普遍的なものから擧げると、た

とへば、多勢の搜索追跡を遁れ様とする時、若しくは、多勢の警戒を破つて目的の所へ進み行かうとする時、一方の暗中に燃料を集めて置いて火を付け、さうして、まだ火の手が揚がらない中に其處を離れて、思ひも寄らぬ一方に身を潜めてゐる。扱て、忽然として火が燃え上がる。搜索し、若しくは警戒してゐる人々の愕然たる目は、期せずして其の火に集まる。或は、どつと一度に其の火に向つて馳せ寄る。其の瞬間の早からず遅からざる機會を利用して、神速なる行動を取り、躍然として目的の所に進み入るか、若しくは轟然として彼等が目の届かぬ範圍に身を遁れる。これが、極めて應用の範圍の廣く、且つ其の機會の多い火遁の術である。

それから、爆裂して發火すべき物、若しくは盛に煙を吹くべき物を、豫め携帶して、これに口火を附けた上に、樞要の所へ置き、或は爐や火鉢の中などに入れ置き、不意に轟然たる大音響と共に火花を散らすか、周囲も見えぬ濃い

煙を漲らせるかし、それに依つて人々の膽を奪ひ目を晦ましてゐる間に、機を失はずに動作して、進入するか退却するかを目的を遂げるのは、更に奏功の靦面な火遁の術である。玩具の花火は勿論、詰まらぬ花火線香の様なものでも、其の用ゐる方に依つては、非常の偉功を奏することがある。否、僅にマッチ一本でさへ、忍術者は軽々しくそれを用ゐず、用ゐれば必ず驚天動地の事を行つて前にも述べた所の、正道に依つての大功を立て、若しくは、萬々免るべからざる死地を脱するのである。

又、自ら火を用ゐるのではなく、必然若しくは偶然に在る所の火と煙、必然若しくは偶然に發した所の火と煙とを、機に投じて巧みに利用するのも、亦、火遁の術として重要視すべきものである。

更に、火遁の術の至妙なる部分に至つては、自分にも火種が無く、又、火種の無い所に、忽然として一閃の火を發し、所謂電光石火に人の心と目とを奪つ

て、進退出入の大事を行ふそれがある。「八犬傳」に所謂犬山道節火遁の術はそれである。道節は暗の中に犬川莊助と戦つたが、莊助の焦つて切込んだ太刀が、身を躲されて力餘り、倒れた石塔へ切着けた。其の刹那に火花が激しく迸つたので、道節は得たりと火遁の術を行ひ、直ちにそれに乘じて姿を隠したとある。これは何も不思議の術な譯ではなく、刃と石と相撃つて、不意に目を射る様な火花が迸ると、人間の本能として、怎麼豪傑でも、一時は端と目を瞑る。其のモーメント、即ち一瞬間こそ、平生頭腦を機敏に身體を軽捷に訓練し抜いて、而も恚う云ふ機會ばかりを窺つてゐる忍術者に取つては、乗すべき至極の好機會なのである。即ち、火花が迸ると、對手が目を瞑るのと、自分が飛び退いて姿を晦ますのと、一分一厘の遅速も無く行ひ得た以上、必ず、奇蹟の様に對手の目の中から消えて了はれることが受合である。

併し、以上は、偶然金と石と打ち合つた際に發した火花を利用しての、火遁

の術であるが、それと同じ場合を自分から作つて、遁形隱身の助けとするのは、術として更に一步を進めたものであらねばならぬ。即ち、自分の持つた刀、其の他鐵製の物を、對手の不意に乗じて石に打ち着け、暗中に火花を散らさせるか、若しくは、刃と刃と打ち合ふ際、敵を切らずに、激しく敵の刃を打つて火花を出し、以て、呀と對手が目を瞑つた一刹那に、素早く犬山道節を極め込むのである。これは少々無理こぢつけの様なこともあり、又甚だ滑稽の様でもあるが、忍術では、不意に敵の目と鼻との間を撲つて、ぴかりと目から火が出たのに晦まされ、敵がたちろいでゐる隙に乘じ、早速犬山を極め込むことをも、矢張り火遁の術に加へてゐる。恚う云ふ火遁の術なら、今でも、下等社會の酔拂つてからの喧嘩に、始終利用されてゐるのである。阿々。

孫子の兵書にも、火攻を最も重んじてゐる。諸葛孔明が軍師として成功したのも、火を用ゐることに長じたからである。忍術の中でも此の火遁の術が最も

大切に、而も、それに準じて、下手に此の火遁の術を用いたら、生兵法大疵の本となり、人を誤り身を誤る事となるのであるから、決して軽々しく行つてはならぬと戒められてある。なほ、此の火遁の術は、木遁の部でも述べた様な、他の種々の遁形の法と共用される場合が、木遁の術よりも更に多いのであるが、こゝに一々例を挙げなくとも、讀者の研究工夫に依つて、それは幾等でも發明し得られるであらうと思ふ。

ホ 土遁の術

今度は、表五遁の中第三に對する土遁の術で、これには三遁の術の地遁十法の中、屋遁の術も含まれてゐる。

およそ、人間の棲息する場所に於て、土程多くして且つ人間の身體と密接の關係があるものは無い。随つて、忍術に於ても、此の一番容易く利用することの出来る土に依つて、形を遁れ身を隠す術を研究するに、決して疎かてはなかつたのである。

普遍的な土遁の法としては、大地の傾斜、其の凹凸、土石の起伏など、すべて地形の便宜を利用して、これに、日や月や燈火の光の當る所と、其の陰になつてゐる所との、對照と變化とを利用し、或は立ち、或は座し、或は伏して、人の視線を避けつゝ進退出入するのである。これは、五遁の術の中でも、最も手ツ取り早く行はれる法で、而も、熟練すると思ひの外に功を奏するのである。土に依つて形を隠すのであるから、忍術者は、夜分地に伏して姿を晦ます助けに、黒染めか、紺染めか、濃い茶染めの着物を尙ぶが、此の中、黒や紺は、實際上面の色と同化する作用が薄いとして、最も茶染めの濃いもの、焦茶よりも更に濃く、殆んど黒に近い茶を重んずるのである。但し、それよりも、なほ忍術者に喜ばれるのは、四人の着る柿色染めを一段濃くした様な、どす黒い赤色の蘇枋染めであるが、これは、全く闇の色と同化する利がある代りには、明るい

所では直ぐ人の目に附いて、怪しみを受ける缺點が伴ふので、餘程特殊の場合でなければ用ひぬ事とし、唯だ、前の『忍術の六具と七方出』の條に記した通り、手拭にだけ蘇枋染めを用ゐてゐる。

これに就いて興味ある事實は、日本の陸軍各人がカーキ色の軍服を着けるのは、滿洲の見渡す限り黄色い土の野と、同じ色の高粱の畑との間に戦つた經驗に教へられたもので、即ち、カーキ色の軍服は土の色と同化して敵の目を晦ます作用があるから、之を取つたものである。諸君考へて見給へ。これこそ偶然に、忍術に所謂土遁の術の一端を利用したものに外ならぬのではないか。忍術應用の範圍も亦廣い哉と云ひたくなるよ。

忍術の教へに、遠く煙塵の揚がるを見て、敵の騎馬隊が此方へ來るのか、彼方へ去るのか、又は野を横切つて通るのかを、判別する秘訣がある。

馬蹄に蹴立てられる煙塵の色の黒みを帯んでゐるのは、敵の此方へ來る徴。

其の白味を帯んでゐるのは、敵の彼方へ去る徴。又なだらかに靡くのは、風に逆らつて一方へ野を横切る徴。渦巻きつゝ靡くは、風に順つて野を横切る徴。

と云ふのがそれである。これも實驗の結果に成つた味はふべき言葉である。随つて、土遁の術の中には、多勢の蹴立てた塵埃を利用して、進退する心得と、自分が蹴立てた塵埃を利用する心得。又、厚い地埃の中に轉がつて、頭も身體も黄粉を塗した様にした上、其の地埃の中に伏して、人の目を逃れる法もある。土を掘つて忍び入り、土を掘つて身を隠し、土を攪んで目潰しを打ち、或は、掘つた土に物を隠したり、陷穽を掘つたりするのも、皆土遁の術の中であるが、こゝに面白いのは、灰を用ゐるのも亦、忍術では土遁の中に算へてゐるのである。鶏卵の兩端へ穴を開けて、中實を吸ひ出し、代りに蕃椒の粉を混ぜた灰を詰めて懐中し、真逆の場合に目潰に用ゐることがある。又敵の城中、敵人の家

などへ忍び入り、見露されて騒ぎ立てられた際、爐か火鉢に掛かつてゐる鐵瓶を引ツくりかへすか、若しくは手近い所に在る水を注ぎ、激しく灰神樂を立てて其の邊を漂々とならせ、隙を見て身を脱するものも、矢張り土遁の一つとされてある。土の底に抜け道を掘つて城を出るものも、又其の方法に依つて城へ侵入するものも、矢張り土遁の部類である。

それから、屋遁の術も亦土遁の中に属するので、屋遁とは、城砦、家屋、宮殿等、すべての建物、及び、塀、石垣、籬根などに依る所の、穩身遁形の術である。

これには、最も頭腦の機敏と身體の輕捷とを要するので、或は蜘蛛の様に貼り付き、或は鼠の様に梁や長押を渡り、鼯の様に床下を潜り、時としては、猫の様に屋根から屋根へと渡り歩いて、雨の様に瓦を飛ばし、大廣間の疊を蹶上げて其の下を鼯鼠の様に潜り歩き、或は壁を突き抜け、塀を躍り越える等、

すべて、三遁の術の地道十法に属する屋遁の術で、五行に象つた表五遁では土遁の術の範圍内である。

その他、動く物、飛ぶ物、鳴る物として石を取扱ふのは、地道十法に石遁の術で、五遁の方では金遁の術の部に含まれてあるが、在るが儘の形にして置いて、其の石に依り姿を隠すのは、矢張り土遁の術の中の一つである。即ち、大きな石の蔭に隠れ、又、高い石を飛び越え、或は、大きな石が磊々と澤山起伏してゐる中に入り、出没進退の妙を極めて追手を惑はすのである。諸葛孔明が魚腹浦と云ふ所に、石を並べて入陣の形を布き、呉の大將陸遜を此の中に迷ひ込ませたのを、孔明の舅黄承彦が救ひ出だしたと云ふのは、無論小説的假構であらうけれど、亦是れ、忍術土遁の術の基く所の理を心得た者の頭腦から編み出された趣向に相違無いのである。

へ 金遁の術

忍術の形體的方面に於て秘奥の部に属せる五遁の術

表五遁の中第四に屬する金遁の術を述べるのであるが、此の中には、三遁の術の地遁十法の中、石遁の術も含まれてゐる。

これは、金屬製の物の光若しくは音を利用して、人の目及び耳を奪ひ、其の瞬間に乗じて、機敏なる頭腦の作用と輕捷なる身體の動作と相俟ちつゝ、虚實を轉換して姿を隠す方法なのである。譬へば、暗中不意に白刃を閃かして人々を恟りさせ、若しくは、突然に洪鐘か半鐘、その他金屬の激しい響を立て、人の注意を其の方へ集めて、それ等の隙を窺ひ、敏活に進退し、身を逃れるか、或は目的の所へ進み入るかするものが、最も普通に行はれる金遁の術で、而も、不意に白刃を閃かす方法は、就中行はれる場合が多く、並びに効果を奏する場合が多い。

それから、土遁の部でも述べた通り、動かぬ物として在るが儘に石を取扱ふのは土遁の術の中であるが、之を、動く物、飛ぶ物、鳴る物として取扱ふに至

れば、表五遁に於ては金遁の術の部類なのである。即ち、高い所から大石を轉がし落したり、木立の中へ石を投げ込んで響きを立てたり、一人乃至數人の頭の上に、ばらばらと石を投げ降らしたりして、人の膽を奪ひ、若しくは人の氣を轉じさせ、其の隙間に進退出入の大事を行ひ了せるのがそれである。但し、此の中木立の中へ石を投げ込むのが、木遁の術と金遁の術の共用法であるとは、木遁の術の部に於て述べた通りであるが、更に、金遁の術（三遁の術に於ては地遁十法の中の石遁）と水遁の術との共用法に於て面白い例がある。

豊臣秀吉が幼時蜂須賀小六の子分となつて、一黨の野武士達と共に或る田舎の豪家へ切取強盜を働きに入つた時、引き揚げ際に、獨り逃げ後れて多勢の包圍を受け、進退維れ谷まつたが、忽ち一計を案じ出して、開夜を幸ひ、有合ふ大石を抱へて、どぶんと井戸の中へ投げ込み、同時に、井戸側から首だけ差入れて、井戸の中に向ひ、あつと消立たましい聲を擧げ、井戸の底迄反響させた

「それ、盗賊が井戸に落ちた！」と云ふ儘に、多勢が寄り集まつて井戸の周圍を取巻いた時は、既に秀吉の日吉丸が、素早く身を退いて物蔭に潜んでゐた時で、何れも井戸の中を焼點に注意を集めてゐる隙を窺ひ、首尾好く逃げ出して身を全うしたとある。これは實際に有つた事ではなくつて、小説的架空談であるのかも知れぬが、然し、實際にも有り得べき事で、又、實際に有りさうな事なのである。さうして、一步を進めて云へば、これを至極の忍術的行動で、縦令架空談としても、確に、忍術の何物なるかを心得た人の作爲に相違無いと思はれる。即ちこれは、石を動く物鳴る物として取扱つたので、表五遁の金遁の術に屬するものであるが、同時に水音を利用したのであるから、金遁の術に水遁の術を共用したものと云はなければなるまい。

ト 水遁の術

扱て、愈々表五遁の第五に位する水遁の術を述べべき段となつた。これには、

三遁の術の地遁十法の中、湯遁の術をも含んでゐることは、申す迄も無く讀者の會得せらるゝ所であらう。

水遁の術の範圍は頗る廣く、最も普遍的なのは、舟や筏で水を渡る事も、水に泳ぐ事も、水を潜る事も、又、水の中に全身を没して、唯だ仰向きに目、耳、鼻、口だけを出し、藻や浮萍を其の上に蔽うて形を隠す事も、皆水遁の術の部類になるのであるが、又、追手を逃れて大きな水甕の傍へ來た時、頃合を見計らつて、手頃の石を其の水甕へ投げ着け、甕が割れて激しい勢ひに水の迸るのを利用し、追手が恟りして度を失ふ一瞬間を外さずに、素早く姿を隠すか、或は身を逃れるかする事などは、水遁の術の中にも際どい方の部類で、支那の古い書物に、水に依つて遁形する忍術者の事を敘して、其の者が追手に迫られ、身を躍らして大きな水甕の中へ飛び込むと、水甕は粉蓋に碎け、破片と水と一緒にになつて八方へ飛び散り、それに打たれて狼狽した追手が、辛と目を定めて

物色する段になれば、既う其の者は見えなくなつてゐたとあるのは、水甕へ石を投げ着けるよりは更に一步を進めた際どい方法で而も其の虚實轉換の理合は同じである。さうして、日吉丸が井戸へ石を投げ込んで身を脱したのが、金遁と水遁との共用法である如く、此の水甕へ石を投着けるのも、嚴密に云へば、矢張り水遁と金遁との共用法で、水甕の中へ飛び込んだ勢ひに甕を砕くのは、純然たる水遁の術の至極の精髓である。無論これも、すべての遁形の術に共通の、虚實轉換の法に外ならぬもの、即ち、實と見せるのが虚で、虚と見せるのが實、甕へ飛び込んで打ち割つて、甕の破片と水の飛沫とに人を打つのが虚で、其の隙に身を隠すのが實に相違無く、其處に何等の不思議も奇妙も無いのであるが、これが、機に投じ節に合して旨く行ひ了ふせられると、甕に飛び込むと同時に、掻き消す様に失せたとばかり思はれ、視る者實に、神變不思議の感じに打たれなければならぬのである。

其の外なほ、水遁の術に於ては、盃で一つの水を得ても、それに依つて直ぐに形を得る方法がある。併しこれとて、火遁の術に於ける、一閃の火を得て形を隠す方法と同じく、甚だ不思議に似て而も不思議でない。盃に一つの水でも、非常に偉功を奏する場合がいくらもある。先づそれを、不意に人の襟許から背中へ注いだとする。又、火鉢を圍んでゐる人の間から、不意にそれを火の上へ注いだとする。今一つの場合は、それを口に啣んで、不意に人の面へ吹き掛けたとする。其の何れにしても、對手は恟り仰天してゐる些かの時間を利用して、有を無に幻滅させることも出来れば、無を有に幻現させることも出来る。其の瞬間の活用法に依つては、魔術もなほ及ばざる不思議が行ひ得られるのである。

チ 人遁の術

扱て、既に遁形の術の正統たる、木火土金水の五遁の術の大要を述べて、忍

術の精髓たる虚實の理を明かにし、萬法一に歸するの實を示した積りであるが、次には愈々以上の五遁を表とし、之に對して裏五遁と呼ばれる所の人遁、禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁の五術を説かねばならぬ事となつた。而も、裏五遁は表五遁に比較して、更に際どく、更に皮肉なものであるから、随つて、これを研究する興味も、表五遁より一層深くなければならぬのである。

此の裏五遁の五法が、三遁の術の人遁十法に匹敵することは、丁度表五遁の五法が地遁十法に匹敵するのと同じであるが、唯異なる所は其の内容の對比である。表五遁と地遁十法とは、甲の一つと乙の二つと宛、きちんと勘定好く對比してゐるけれども、裏五遁と人遁十法とは其の割に行かず、裏五遁の人遁一つが、人遁十法の中男遁、女遁、老遁、幼遁、貴遁、賤遁の六つに匹敵し、さうして、其の他の禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁、四つは、人遁十法に於ける禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁と同じものである。先づ、第一位の最も複雑なる人遁の術から

説き始めやう。

人遁は讀んで字の如く、人間に依れる遁形の術、即ち、自己以外の人間の一個若しくは數個、乃至多數に、對者の注意の燒點を置かせて、其の隙間に自己の形を隠す術なのである。言を換へて云へば、虚なる自己以外の人間を實と見せて、實なる自己を虚と見せる法なのである。而して、自己以外の人間を利用する人遁の術が、實地に行はれる場合を大別して、

- (一) 肉親、知己、味方等、すべて自己の側に立つ者を利用する場合。
 - (二) 自己と反對の側に立つ者を利用する場合。
 - (三) 何の關係も交渉も無き者を利用する場合。
- の三と爲し、又、其の利用の方法を、

- (一) 許諾を得て爲す所の利用。
- (二) 許諾を得ずして爲す所の利用。

忍術の形體的方面に於て秘奥の部に屬せる五遁の術

の二に大別し、更に又、許諾を得ずして爲す所の利用を二つに別けて、

(一) 利用されたる者に損害を興ふる場合。

(二) 利用されたる者に損害を興へざる場合。

と爲し、なほ又必然に、

(一) 損害を興ふる場合に於ても、又興へざる場合に於ても、始より終に至る迄、全然被利用者に利用されたることを知らしめざる遣り方。

(二) 始めより之を知らしむる遣り方。

(三) 後に至つて之を知らしむる遣り方。

の三方がそれに就いて區別されなければならぬのである。

斯様に人遁の術と云ふものは、其の大體からして、既に頗る複雑な上に、人遁の術の別法寧ろ變法として、己れ自ら己れ以外の者に形を變ずる場合がある。即ち、以上の正法、常法と相對して、

(一) 己れ以外の人間に對者の注意を移さしめて、己れの形を隠す場合。(正法、常法)

(二) 己れ自ら己れ以外の人間に形を變じて、對者の注意を逃る、場合。(別法、變法)

の二つとなるのである。その他、別法、變法の更に變種として、

己れの扮装の一部分を残して、それに對者の注意を引き、以て、己れの本體を對者が注意せざる範圍に逃れしむる場合。

と云ふのがある。

例を擧げて云へば、眞田幸村が家康を狙撃仕様とて、縮筒と云ふ短銃を懐中し、雑兵の姿に身を窺して、茶臼山の陣中に忍び込み、家康が廁を出て手を洗ふ所へ一發見舞つたが、運悪く筒先狂つて功を奏さなかつた事がある。此の時陣中上を下へと騒動して、曲者の詮議厳しきを、幸村恚うして脱け出したか

と云ふに、平氣で雑兵の中に雜つて、雑兵共が互に名を呼び雑談するを聴き取つた上、其の中愚直らしい雑兵に目を付け、狎々しく肩をたゝいて名を呼び、つひ心易く話し合つて、巧に陣中の合言葉迄も聞き、其の合言葉に依つて、旨々と陣門を立ち出でたとある。これが、人遁の術の十分に行ひ得られた效驗を語るものではないか。

曾我兄弟が、富士の卷狩に際して工藤祐經を討ち、父の讐を報した時、假屋の割符を得て、畠山重忠の家人が使に出た者と偽り、陣屋々々の前を押通つた時、終に怪みを受けて、危く事現れ様としたが、折好く通り掛かつた御所五郎丸が兄弟の志しを感み、己れの知人の體にもてなして難關を通過させたと云ふ話がある。これも、無論人遁の術の範圍内である。

秀吉が、明智を討たうとて中國から上つた時、一騎抜け駆けをして、尼ヶ崎で四方田但馬守に襲はれ、野中の寺へ逃げ込んで風呂場に入り、有合ふ剃刀で

頭を剃り圓め、坊主の物の無地の浴衣を着込んで庫裡へ行き、臺所で味噌を摺る手傳ひをしたと云ふ物語がある。これもまア小説的架空談であらうが、併し忍術流行の其の時代には有り得べき事實で、人遁の術の神髓を貫いてゐる物語である。なほ又、豫め秀吉が来ることを測つて、四方田が部下の兵士と共に道普請の黒鍬（土方人足）に打扮ち、往來に働いて待ち構へてゐたと云ふのも、矢張り人遁の術の範圍に屬するのである。

家康が真田に破られて、身を民家に潜めた話がある。それは桶屋の仕事場で、主人の氣轉から、出來上がつた大桶を伏せた中に家康を忍ばせ、自分は平氣で、其の傍に板や鉋屑を取り散らして、仕事に熱中してゐる状態を見せたので、さしもの真田幸村もこれには一杯食はされ、疑はずして立ち去つたとある。これは匿まはれた家康と匿まつた桶屋とが、心を合はせて行つた人遁の術で、其の眼目の點は、平氣で桶屋が仕事をしてゐる所にあるのである。これと似寄つた

話は、『續應仁記』に、

常桓禪門は、六月四日の戦場を落延て播磨路へ赴きけれども、敵徒路々を遮つて落行く方も塞がりければ、大物の庄の民家に入て紺屋を頼み忍び居らる。紺搔の男奇特なる者にて甲斐々々しく頼まれ、頓而我家の藍瓶を打伏せて、其中に常桓を隠し納れ置いて、己れはさあらぬ體をして布を染て居たりける。三好家の者共所々方々を捜しけれども、常桓見え給はざれば、餘りに尋ね兼ねけるに、其中小ざかしき者ありて瓜を數多持來り、折節彼家のあたりに遊び居ける童部共を近着け、若し此邊に落ち人や隠れ居けん、それを教へ聞かするならば此瓜を取らせんと云ふ。炎天の嗜物にては有り、童部共瓜のほしさに何心もなく云様は、あれなる紺屋の背戸藍瓶の下にこそ坊主一人隠れ居たれと告げれば、扱てはそれこそ恠しけれとて捜す、兵共紺屋へむずと押入つて紺搔の男を搦め置き、其外多勢して彼藍瓶を取の

け隠れし法師を出し見れば、疑も無き常桓なり。即ち山城守を檢視として、六月八日寅の刻ばかりに尼ヶ崎大物の庄廣徳寺に於て常桓禪門に腹を切らせけるとぞ。(常桓は管領細川高國の法名。)

とあるのである。これは、人遁の術に對する人遁の術の技比べて、結局後者の人遁の術が前者のそれに打勝つた譯である。なほ、此の家康の例と高國の例とに於ては、表五遁の土遁の術(三遁の術に於ては、地遁十法の中の屋遁の術)が兩用されてゐることを認めなければならぬ。

以上の諸例を、前に掲げた種々の場合に當て候めて研究したならば、人遁の術の何物なるかを會得するに苦しむを要せぬのである。なほ、三遁の術の人遁十法に於ける、男遁、女遁、老遁、幼遁、貴遁、賤遁など云ふのも、詮じ詰めた所の根底は皆一つなので、それ々の人間に依つて形を隠す場合と、それ々の人間に扮して注意を避ける場合とを、別つたものに他ならぬ。忍術七方

出の中の、虚無僧、出家、山伏、商人、放下師、猿樂の六つは、古へに於ける變装の種類を示したものであるが、同時にそれ等も、人遁の術を行ふに就いての、準備となり手段となるのである。

但し、すべての忍術は、形體的方面と心意的方面と表裏の關係を爲して居り、其の形體的方面が表になつてゐる時には、心意的方面が裏になり、又、心意的方面が表になつてゐる時には、形體的方面が裏になつて、如何なる場合にも、二つのものを絶對に離して見ることが出来ないとは、前にも既に述べた所であるのみならず、以上擧げ來つた諸例に依つても、形體的方面に於ける忍術の中に、一つとして、洗練された心意の作用の助けを借らずに出来る方法が無いと云ふ事を、會得されるだらうと思ふ。而も、忍術の形體的方面に屬する遁形の術に於て、此の人遁の術こそは、分類上形體方面には編入して置くものゝ、形體的方面に屬せる他の諸法に比べて、特別に心意的方面の分子を多量に含んで

ゐることを認めなければならぬのである。

もう一つ、人遁の術の範圍に屬する題目として、私が忍術者の實驗を見たことを御話しやう。

嘗て私の知人に、伊賀流甲賀流に渡つての忍術を心得た僧形の老人があつた。或る冬の夜長に、山寺の方丈で七八人の小宴會があつた後、人々は其老人に向つて、忍術と云ふものは怎麼ものであるか、一寸行つて見せては呉れないかと頼んだが、老人は唯だ笑つてゐるばかりで、肯ふ様子も見えなかつたのに、聽て人々の不意を窺つて、車座の真中に吊られた洋燈を吹き消した。人々これはと恟りしたが、何か不思議でも起るか、暫く凝然として様子を窺つても、一向何の異變も無いので、間もなく洋燈を點さうと隣寸を摺つた所、何時の間にか洋燈が無くなつてゐる。扱ては、愈々忍術を行ふのであるかと思ふと、興味半分、惡戯半分、一同競ひ立つて、座敷

の内外を點檢すると、老人は見えぬが、先づ座敷の外の椽側に、一尺ばかり明けた障子に傍うて置かれてある洋燈を發見した。そこで、置かれてある場所て洋燈を點して、座敷へ持つて歸らうとした時、ふと、前方の椽側が盡きる所の隅に、老人が圓くなつて突伏してゐる姿を、弱い洋燈の明りの末が朦朧と照らし出だした。それを最初に見附けたのが住持の坊さんで、思はずぶつと吹き出し、「皆さん來て御覽なさい、あれが忍術と云ふものなさうです。忍術使ひの先生が墓蝦にでも化けた積りか、縞の羽織を着て、椽側の隅に圓くなつてゐられます。」と云ふと、一同もそれに連れられ、「やア、そりや眞誠ですか。」と、笑つて遣る氣で座を立ち掛けた時、忽然として、呵々と高く笑ふ聲が座中から起つた。驚いて振向くと、忍術者の老人は、平然として元の座に坐つてゐるのである。「やツ、老人が二個になつた！」と肝を潰した坊さんは、洋燈を手に提げた儘椽側の隅へ行つて、

圓く突伏してゐる形の者へ手を掛けて見ると、それは、以前から其處に置かれてある米俵へ、唯だ羽織だけが掛けたもので、元の座にゐるのが眞の本人であつた。そこで、老人得々として云ふには、「怎うです皆さん。不意に洋燈を消して、皆さんが恟りなすつた隙を窺ひ、明りに慣れた皆さんの目が、まだ暗い所で物の氣配を認めるとこの出來ない中に、洋燈を外して椽側へ持つて行き、同時に、手早く羽織を脱いで米俵へ掛け、皆さんが立ち騒ぎ始めた氣の動きに乗じて、そうツと元の座へ戻つてゐたのです。僅に二三秒間でも、皆さんに、此の老人が二人になつた様に、不思議の感じを抱かせたのが、忍術としての大成功で、不思議でない不思議はこゝに在り、たツた二三秒でも、皆さんを煙に捲いてゐる間には、怎麼非常手段も易々と行はれるのです。忍術では、もつといくらも不思議な事が出来るが、歸する所の虚實の驅引は、要り此の外に出でないのです。」と述べ了つて、

又もや老人は呵々大笑した。

リ 禽遁の術

裏五遁の中人遁の術だけは、利用する対象が人間だけに、人を謀る必要からして、特に多量の心意的方面を加味してゐるのであるが、それ以下の禽遁、獸遁、蟲遁、魚遁に至つては、利用する対象が人間以下の動物となるから、二から三、四、五と下がるに随つて、形體的方面の分量が段々多くなり、同時に心意的方面の分量が段々少くなるのである。さうして、禽遁以下の四法は、裏五遁に於けるそれも、三遁の術の八遁十法に於けるそれも、同じものであると御承知を願ひたい。

禽遁の術と云へば、一寸栗のキントンなどを聯想して、甘味を含んでゐる様にも聞えるが、却々甘いどころの段ではなく、其の實頗る辛辣のある方法である。

鳥類の形體

其の啼き聲

其の羽搏き

などを利用して、隱身遁形を行ふ所の術で、

鳥類を自然の在るが儘に利用する場合、

鳥類を引連れ若しくは携帶して利用する場合。

の二種に別れてゐる。

夜中、鴉などが多く集まつて塙としてゐる森の木を敲き、それ等の眼を驚かし、噪ぎ立たせて、人々が何事かと其の森にのみ注意し、若しくは森を目掛けて寄り集まる暇に、他の方面から不意に出て、侵入若しくは逃走の目的を達するのが、最も普遍的な禽遁の術である。而して、これより更に一步を進めて、突然宿鳥を驚かした消立たましい騒ぎに打たれ、敵人が周章狼狽して、上を下

へと動搖する混亂に乗じ、急に掩撃して奇捷を博するは、禽遁の術を積極的に用ゐ得た偉大なる効果である。源頼朝が富士川を隔て、平家の軍勢と對陣した時、夜半に、富士沼に宿つてゐる數多の水禽を驚かし立て、其の凄まじい羽搏きに平家の夢を破り、自ら擾亂して終に陣を棄て、走らしめたのは、此の例に數ふべき著大なる歴史的事實である。

鶏 や家鴨の澤山ゐる所へ飛び込んで、それ等を擾亂顛倒せしめ、ぎやツぎやツガツと八方に散亂し、天地を震動する様な大騒ぎになつた機會を利用して、進退宜しきに叶ふ行動を取るのも、亦禽遁の術の一つであるが、これは、夜中に於て最も効果を奏すべく、然し、日中でも亦十分に成績を擧げることが出来るのである。何にしる、數多の鶏や家鴨を驚かした騒動と云ふものは、他に比ぶべきものが無い程に激しいのであるから、其の利用の仕方に依つては、随分困難な事を行ふ助けになるのである。

それから、携帶して利用するに便宜なのは、鴿の類で、たまには、特に鴿の羽や脚を縛り、其の目も包み、おとなしくしてゐる様にして隠し持つこともある。之を不意に室内に放つて、人を疑惑せしめ、若しくは動搖せしめ、其の間に事を行ふのであるが、時としては、それ等の鳥の脚に、目潰しに用ゐる灰と蕃椒の粉とを混ぜた物を、穴のある囊に入れて括り着け、或は、爆竹、火花線香の、火花を散らして、人をも鳥其の物をも驚倒せしむる目的に於ける火薬に、口火を附けて、室内に放つなどの方法もある。

又 禽遁の術

禽遁の術も、其の基く所は矢張り禽遁の術と同じであるが、唯だ、其の應用の範圍が一段廣く、随つて、應用の方法も一段多いのである。

禽遁の術に於て、最も普遍的に研究せられるは、犬に就いての問題である。さうして、これには、

如何にして犬を用ゐんかの問題。

如何にして犬を避けんかの問題。

の二つがあり、兎に角犬を始末する事は、忍術に於て重要な條件となつてゐる。此の中犬を用ゐる方法には、

犬其の物を用ゐる場合。

犬の吠える聲を真似る場合。

の二つあるが、好く飼ひ馴らした犬を使つて、侵入せんとする、若しくは襲撃せんとする、目的の所を偵察させるのが、犬を用ゐる方法の眼目で、之に就いての適例を挙げると、南北朝時代に當り、新田の臣で義貞四天王の一人畑六郎左衛門時能が、犬獅子と云ふ犬を軍中に用ひ、敵陣に夜討を試み様とするに臨み、先づ犬獅子を遣はし偵察せしむるに、若し敵陣に用意がある時には、犬獅子尾を垂れて悄然として歸り、悲しげな聲を出して鳴くが、敵が用意を怠り、

夜襲に都合のいゝ時は、尾を掉り立て、勇んで歸り、頻りに喜ばしげに吠え立てるとは、太平記が傳へる所である。巧に犬の吠える聲を真似て人を惑はし、注意を避けるのも、矢張り此の獸道の術の範圍である。

而も、忍術に於て犬を問題としての更に一段重要な研究は、犬を用ゐる事よりも犬を避ける事なので、忍術者は、人に咎められることを免れ得ても、犬に咎められることを免れ得ない場合が多いからである。此の場合に於ては、盜賊の苦心も、盜賊を捕へる探偵の苦心も、正邪共に一致してゐるので、爲に、古へから、犬を避ける方法に就いて種々の研究が積まれてゐるが、結局、犬の性を知つて之を利用するの外は無いのである。即ち平生努めて犬を手懐けて、犬と自分との間に親しみを作り、而も成るべく多くの犬に接して、種々の犬の性癖と、一般の犬の共通性とを、十分に呑み込み、怎麼犬でも自分の前には尾を掉らなければならぬ様に、犬に對する征服の能力を養ひ成すのである。但し、

食物の前には一も二も無く柔順になる犬の性を利用すべく、豫め食物を携帯してゐて、自分を養める犬を買収するのも、亦忍術者の行ふ一法であるが、併しこれは末である。

禽遁の術に於て、鶴や鶏を携帯して室内に放つことがある様に、獸遁の術に於ては、一頭乃至數頭の鼠を懐中して、之を室内に放ち、人を吃驚せしめ、若しくは疑惑せしむる方法がある。仁木彈正の鼠の術など云ふものは、要り憊う云ふ事を根據に空想を逞しうした架空談であらう。併し、忍術に於ける正當なる、

鼠の術

と云ふのは、主として、長押を渡り、梁を傳つて、走り歩く様に、十分練習し抜いた効果を實地に應用することを意味するので、驅け乍ら、物の隙間に旨く身を當て依りて驅け抜けるのも、忍術に於ては鼠の術の中である。(それと同じ

場合に、するゝと迂り抜けるのが蛇の術の方で、這ひ抜けるのが蜘蛛の術の部である。)

木曾義仲が俱利伽羅谷で火牛の謀を用ひ、平家十萬の大軍を粉塵したのは、矢張り、之を忍術的立場から見ても、獸遁の術を積極的に用ひた範圍のものに他ならぬのである。これと同じ方式を忍術的にコンデンスしたものは、牛或は馬を人込みの中に放ち、其の驚愕擾亂に乗じて事を行ふそれである。赤松満祐が足利將軍義教を弑するや、己の邸に將軍を招じて饗應し、宴酣なる時、不意に多くの裸馬を大庭に放ち、將軍扈從の人々が擾亂するに乗じて、苦も無く將軍を捻伏せ、首掻き切つたので、これは正しく、忍術の方から見ても獸遁の術を應用したものである。又、秀吉が狭い田の中の路で四方田但馬守に追ひ掛けられた時、鞍から飛び降りて馬を後へ向け、刀を抜いて馬の尻へ斬り着け、痛みに堪えずして、元來た路へ狂ひ馳せた馬に、但馬守を蹴倒させ様と試みたの

は、これぞ確に、獸遁の術を正當に用いたもので、獸遁の術の多く用ゐられるのは恠ういふ場合である。尤も、秀吉の例は自分の馬を用いたのであるが、多くの場合に於ては、追手に迫られた時に、偶然其の場に来掛かる牛馬を利用し、之を驚かし、若しくは怒らしめて、追手に向ひ馳突せしむるか、或はそれへ乗つて逃げるかするのである。

なほ、恠ういふ場合に、牛馬にあらぬ他の家畜の群を利用した例は、三國志に於ける所謂妖術者の左慈が、曹操の追手に迫られた時、前面から牧童が羊の群を驅つて来たので、左慈は得たりと其の羊の群の中へ飛び込んだら、即ち掻き消す如く姿が見えなくなつたとあるが、實際、不意に羊の群へ飛び込んで、元來臆病な羊の、而も數百と云ふ多數のそれを、狼狽擾亂、右往左往に馳せ惑はせたら、追手の者共も面喰つて、一時は茫然となるに相違無く、其の間に、機敏な頭腦と輕捷な身體とも、節に合して働かせたら、必ずしも妖術を用ゐて

姿を掻き消さなくとも、掻き消したと同様の効果を擧げて、追手の目の前に形を隠し得る筈である。

其の他、過去に於て忍術に猿を用いた實例は無いが、必ず、此の方法に依つて獸遁の術を行ふべく、十分に猿を利用することが出来様と思ふ、伺ひ馴らした猿は、忍術に用ゐて、種々の役に立つだらうと思はれる。殊に今日は衣囊猿と云つて、衣囊へ入れて歩かれる小さな猿が、西洋人などに玩具として愛養される流行を見る様である。此のポケット猿を忍術に應用したら、屹度面白い効果を見るに相違無いと思ふ。文明流の新しい忍術が出来たらうと思ふ。

ル 蟲遁の術、蛇の術、蝦蟇の術、蜘蛛の術

これも、方式理論共に禽遁及び獸遁と同じ事であるが、前の二法に比べて、より剴切に忍術的なのが、此の術の特色である。それと云ふのも、此の術に於いては、忍術と云へば直ぐに聯想される所の、

蛇

蝦蟇

とが、重に利用されるからである。

兒雷也が蝦蟇の術、大蛇丸が蛇の術など、蝦蟇や蛇は、何と無く妖術臭いものに思ひなされ、蝦蟇仙人など、云つて神秘的のもの迄も空想されるてゐる。それだけ、蛇や蝦蟇は忍術に用ひることを便宜とされたもので、其の調法がれる主要の點は、

極めて便宜に携帯し得る事。

人を驚き怖れしむる效の著しき事。

容易に死なぬ事。

の三つにあるのである。さうして、蛇や蝦蟇の忍術者にとつて特に重要な所以は蛇や蝦蟇の實物を用ゐる場合。

己れ自ら蛇や蝦蟇の姿態動靜を學ぶ場合。

の二つあるからで、其の爲に、忍術者は特に蛇や蝦蟇に就いて研究工夫を費すのである。

蛇の特色は動中の靜。

蝦蟇の特色は靜中の動。

と、此の二つの別を吞込むことが十分であつたならば、其の實物を利用して、其の姿態動靜を學んでも、共に宜しきを得られるだらう。

蛇は、之を衆人群れ集まる中に放つて、最も靜に、何の物音も氣配も無い様なものでゐながら、是れ程底から人を驚き恐れしむるものが無いのである。さうして、之を飼ひ馴らすと、懐へても袂へても無難作に入れて歩かれるのみならず、飼ひ馴らさないものでも、何かに包んで持つて歩くと、音も氣配もさせないことが出来るから、之を忍術に利用して、偉大の効果を奏する場合が多

い。又、蝦蟇と云ふものも、大きさの割には軽く、而かも、静止不動の態度を何時迄も守る奴故、携帯に頗る便で、これを或る目的の所へ持ち込み、燈火の位置と、其の明るみと陰とを利用して、壁の隅か何處かに置く時は、兎に角、静止の中に非常の活動を藏して、凝然としてゐながら、ばくりと口を開いて、近所に飛んでゐる羽蟲を吸ひ寄せる程の、能力を持つてゐる蝦蟇の事であるから、忽ち人の注意を引寄せ、而も、其の位置と陰明るみの利用に依つて、ひよつと見た人の目に、壁に映る蝦蟇の影法師と、其の實體と重なつて、二つの區別を辨識せぬ中、先づ、朦朧たる絶大の蝦蟇が現れたと思つて、魂を飛ばし膽を破らしむることが出来る。蝦蟇は、其の野呂々々として動く時よりも、手を突いて御辭儀をした様な形状を取り乍ら、而も、傲然と空嘯いて、眼中に物無き態度を示しつゝ、泰山前に崩れても更に動ぜぬと云ふ様に凝然としてゐる時に、其の人を壓する權威が認められるのである。斯くて、在るべからざる所

に、大きな蝦蟇がにゆうつとして控へてゐるので、人々肝を潰した時、突如として、他の一方に物の氣配がしたと覺えられ、又も恟りして其の方へ行つて見ると、早や其處に或る變事が起つて、而も、何者がそれを行つたと云ふ形跡を留めないから、益々人々が狼狽し、一大妖術を施された様に疑惑するなど、忍術としては、それに至極の妙味があるのである。

以上は、蛇や蝦蟇の實物を利用する場合で、古への或る忍術者などは、右の袂に蛇を入れ、左の袂へ蝦蟇を入れて、一方に蝦蟇を出だし、同時に他の一方から蛇を這ひ込ませ、人をして殆んど氣死せんとする迄に驚き怖れしめてゐる間に、易々と目的を遂げることを得意としたと傳へられてゐる。

次に、蛇や蝦蟇の姿態動靜を學ぶ方法としては、第一自分の呼吸と足音とを極度に潜めて、怎麼狭い所でも、怎麼がたくした所でも、又怎麼勾配の急な所でも、するゝと音も無く通過するのを、忍術では、

蛇行の法

と云つて練習に努め、それから、石の根に傍ひ、樹の本に寄り、若しくは土の凹みに伏し、體の下に潜めなどし、全くそれ等の物と同化した様に、息も脈搏も無い程に凝然と押鎮まり、此際若し棒で打たれ、或は刃物で斬り着けられ、突掛けられても、更にびくりとも動かずに、我慢してゐるのが、忍術に於ける

蝦蟇の術

の本義なので、これには、一段の心身の練習——殊に呼吸の鍛練を要するのである。

蟲遁の術に於ては、蛇、蝦蟇の外に、蜈蚣、蝶、其の他種々の蟲類を利用するが、殊に、蛇、蝦蟇二つの物の外、好んで忍術者に利用されるのは蜘蛛である。これも、蛇、蝦蟇を用ゐると同じ方式に蜘蛛の實物を利用するのと、蜘蛛の姿態動靜を學ぶものとの二法がある。忍術に於て、

蜘蛛の術

と云ふのは、此の蜘蛛の姿態動靜を學ぶことを意味するので、びたりと壁に貼り附いた様になつて人目を逃れ、又、壁に貼り附いた形で、一方から他の一方へ傳ひ歩くなどが、蜘蛛の術の中の尋常なるもの。其の秘妙の域に入つては、手と身體とを餅の様に柔かにして、びたりと壁に吸ひ着いた結果、足も床を離れて、眞の蜘蛛の様に壁の中間に貼り附くことをも、正當の練習の結果、何の不思議も無く出来る者さへあるのである。

ヲ 魚遁の術

裏五遁の中で、魚遁の術だけが、唯だ一種趣が異つてゐる。即ち、これには、魚其の物の實物を利用する場合が殆んど先づ無く、水を泳ぎ、水を潜つて、魚の生活行動を學ぶ所に、此の術の全部があるのである。

これには、自在に水を泳ぐこと、長く水の底に潜んでゐることが肝要で、

水練に關する有らゆる法術を練習し抜く必要がある。随つて、此の裏五遁の魚遁の術は、當然に表五遁の水遁の術の一半と合致しなければならぬ約束に支配せられてゐる。歴史的人物としては、鳥居強右衛門、鳥居又助、小説的人物としては、河童の吉藏、浪裡跳張順など、此の魚遁の術を能くした者と云はれることが出来やう。今日の潜航艇も、亦潜水衣を着けて働く潜水夫も、忍術的見地の下に於ては、魚遁の術の部に編入せらるべきものであらう。

但し、魚遁の術に於ては、魚の實物を利用する場合が全く無いでも無い、かの專諸が吳王僚を刺す時、厨人に雜つて、一大魚の炙物を捧げ、王の食卓に近づき其の魚の腹に匿した短劍を取り出して、首尾好く吳王を刺したなどは、又魚遁の術の中に數ふべきものである。鯉を他に贈つて、其の腹の中に密書を忍ばせた話など、是亦魚遁の術の範圍内でないとは云へない。

ワ

天遁十法の要領

既に、隱身遁形の術の正統たる、木火土金水五遁の術と、之に對して裏五遁と呼ばれる人禽獸蟲魚の五法とを、實地に依つて解説し、併せて、天地人三遁の術の中、地遁人遁各十法の何物なるかを、明かにしたものであるが、三遁の術の天遁十法だけは、まだ手を着けてゐない。これはこれだけに特殊のもので、五遁の術と云ふ名目は、今日に於て知つてゐる者があつても、此の三遁の術、殊に天遁十法の何物なるかを心得た人は、恐らくは一人もあるまいと思ふ。

天遁十法とは、前にも挙げた通り、

日遁、月遁、星遁、雲遁、霧遁、雷遁、電遁、風遁、雨遁、雪遁。

の併せて十であるが、支那三國時代の軍師諸葛孔明が、能く雲霧を起し、風雨を驅つて、謀を行ひ敵を破るの材料に供したと傳へられ、然も、それが不思議の法術である様に稱せられてゐる。然し、實際は決して、五丁六甲の神を使つたの、風伯雨師を用ゐたのと云ふ様な譯ではなく、要り、今日に於ける氣象

學に通じ、天氣豫防と同じ方式に、天候氣象の變を豫知するに長じた結果に他ならぬのである。天道の術の基く所は、要り此の點に在るので、天候氣象の變化を豫知しつゝ、それに適應して然るべく忍術的行動を取ることが、天道の術の本義であると同時に、偶然に來つた天候氣象の變化、及び、自然を其の儘の明暗陰晴乾濕空濛等を利用するのが、其の術の常なのである。

故に、天道の術は、他の隱身遁形の諸法に比較して、心意的方面の分子を含むこと多量に、又頗る科學的のものであるから、科學が進歩すればする程、隨つて此の術も亦發達すべき譯であらねばならぬ。

カ 日遁の術

天道十法の要領は既に述べた通りで、其の中日遁の術は、主に戰爭の際に用ゐられるものがある。即ち、我軍には日を後に負はせ、敵軍をば日に向はしめて、我は、日に背いて明かな目で、敵の日に向つた明かな一面を見、敵には、日に

向つて暗んだ目で、我の日に背いた暗い一面を見せる様にするのである。これは戰爭の仕勝手に非常の差違があり、隨つて、其の勝敗の結果にも非常の影響があるのである。

それから、對者の目を成るべく強い日光に晒させる様にして、自分の姿を日蔭の暗所に隠すことを謀るのも、亦日遁の術の一つで、磨き立てか金屬製の物、若しくは鏡の様な物を持ち、之を以て激しく日光を反射させ、自分に迫る者の目を眩ますのも、矢張り其の一つ、なほ又、レンズを透して日光の燒點を作り、火の無い場合、火の發すべき原料の無い場合などに、容易く火を作ること、忍術に應用して日遁の術となるのである。

ヨ 月遁の術

これは、月光の照らす所と、其の蔭の所とを利用して、進退出没節に合するの行動を取るの術で、夜だけに、日遁の術よりは一段應用の場合が多い。

又、月の出入りを測つて、其の前若しくは其の後に事を行ふ計畫を豫定するの必要であるか、更にそれよりも大切なのは、今は曇つて闇夜であるが、これから大略何時間経つたら、晴れて明るい月夜になるとか、或は、現に皎々と月が照つてゐるけれども、大凡どのくらゐの後には、急に空模様が変わつて雨になるとか、天候氣象に關する智識と經驗とに依り、それに應ずる準備をして進退出没する事である。

夕 星遁の術

これは、日夜より暗く、闇夜よりは明るい程度の、星空に適した進退出没を計畫する術で、北斗とか、金星とか、火星とか。木星とか云ふ、目に附き易い星を目標に、方向を定めて進退するもの、矢張り星遁の術の中である。

レ 雪遁の術

これは、晝の曇天と夜の曇天とを利用する方法であるが、夜の曇天は即ち闇

夜であるから、最も忍術を行ふに適してゐる。表五遁及び裏五遁、并びに三通の術の中の地遁十法、人遁十法、共に之と共同して、最も十分の効果を奏するのである。

それから忍術には、夜遠方を窺ふには、地に坐して雲に隙かし見るべしとの教へがある。前方に並んでゐる者は人間であるか、杭か柵かであるか、若しくは石地蔵であるかを見別けるには、此の方法に限るのである。又、

闇中に白きを踏む、水にあらざるは是れ石。

と云ふのは、佛家の語であるが、忍術に於ても、石を踏んでいゝ時と悪い時、水を踏んでいゝ時と悪い時とあるから、闇中に白く目立つ物に注意する教へがある。

ソ 霧遁の術

霧はすべての物を蔽ひ隠して、咫尺相見ざるに到らしむるものであるから、

忍術に於ては、極めて利用の効が多いのである。霧に乗じて兵を用ひ、霧に乗じて潜行密偵を行ふ。何れか其の功あらざらんやである。而も、これには、

(一) 偶然の霧を利用する場合。

(二) 豫め霧の起るべきを測つて、之を利用する場合。

の二つがある。(一)の場合は、別に説明するも無い事で、肝腎な問題(二)はの場合に在るのであるが、これも、十分に雨が降つて後、急に暖かくなつて、而も風が無く日が暮れた夜とか、若しくは、海から陸に掛けて十分に雨が降つた上、暖かい南風が午後から其の上を渡り、さうして、夕方から北の風に變り、急に冷氣を催した夜とか云ふ様に、豫め、實地の研究を積んで、霧の起るべきを測り、隱身遁形に利用する事が最も重要である。これは、旨く行くと、自分の能力で霧を起したも同じ様な、殆んど不思議に齊しい結果を見るので、忍術に

霧隠れの術

と云ふは、詰まり之を意味するのである。

ツ 雷遁の術

雷は遠くて空鳴りをする事もあるが、忍術に於ける雷遁は、大雨と電光との伴ふそれを利用するのである。これも、偶然の雷雨を利用するのと、豫め天候の激變を測り、それに應じて宜しき舉措に出づると、二つの場合があり、而も、霧遁の部に於て述べた通り、豫測し得て功を奏する方が重要である。

織田信長が、雷雨に乗じて奇襲を行ひ、桶狭間に今川義元を滅つたのは、偶然の雷雨を利用したものであるが、此の寡兵を用ひて大敵を破つた偉勳も、忍術的見地から見ると、矢張り雷遁の術に他ならぬのである。

又一つ、雷を恐れる振をして對者に一ぱい食はせた例がある。即ち、三國志に、『青梅酒を煮て英雄を論ず』と云ふ條があるが、劉備が、曹操に英雄と睨まれて、己の身の危からんことを慮り、折り好く雷の鳴り出したのを幸ひ、食

事をしてゐる箸を落して、雷を恐れる體を装ふたのは、亦是れ、心意的方面に屬する雷遁の術と云ひ得られるだらう。

ネ 電遁の術

多くの場合に於て、雷遁の術と區別はないが、稀には、闇夜に電ばかり強く光つて、雷も鳴らなければ雨も降らない場合がある。恚ういふ時に、電光と闇との變化及び相對を利用して、巧に進退出没するのが電遁の術である芭蕉の句に、

稻妻や闇の方行く五位の聲

とあるのを能く味つたら、忍術電遁の妙旨を嘗め得られ様と思ふ。

ナ 風遁の術

風遁は、大風に乗じて火を放つのが、表五遁の火遁の術との共用法で、大風砂塵を捲ぐに乗じて事を行ふのは、同じく土遁の術との共用法、此の第二の方

法は、時として霧遁の術と同じ効果を奏することがある。さうして、これにも矢張り、

(一) 偶然の大風を利用する場合。

(二) 豫め大風の起るべきを測つて、之に應ずる場合。

の二つがある。

ラ 雨遁の術

雷雨に乗じて行ふ隱身遁形の術は、雷遁の部に屬するが、唯だの雨、若しくは風雨に乗じて進退出没するのは、即ち雨遁の術其の物である。無論これにも、偶然の雨を利用するのと、測め雨の到るべきを測つてこれに應ずるのと、二つあるのであるが、此の雨遁の術には、

(一) 雨の形衆に依つて己れの形を紛らす事。

(二) 雨の音響に依つて己れの響を紛らす事。

忍術の形體的方面に於て秘奥の部に屬せる五遁の術

の二つがある。其の外特に用ゐられるは、雨の音響（無論雨垂の音をも含む）を利用して、對者の注意を惑はす方法である。秀吉が幼時蜂須賀小六の乾分になつてゐた時、小六に刀を呉れと望んで、今夜忍んで来て側に在る刀を盗んだら呉れ様と云はれ、雨に乗じて、小六が寢間の軒下に笠を置き、それを雨垂れの打つに任せて、自分は知らん顔をして我が寢床に夢を結び、小六が猿奴軒下に來て内の様子を探つてゐるのだと思ひ、夜もすがら油断をせず刀を守り、曉方になつて辛と安心して、とろ／＼と目どろんだ時、蚤くも起きて來て、内の方から様子を探つてゐた秀吉が、得たりと其の際に乘じ、刀を盗み去つたので、後で目を覺ました小六が、後生恐るべしと、舌を捲いて驚いたと云ふ俗傳があるが、これは、忍術の雨遁の何物なるかを語るべく、極めて凱切の例話である。

△ 雪遁の術

これ一つで、天遁十法は了るのであるが、一寸考へると、雪は隱身遁形に不便

なもので、第一、兎の様に白い物でない以上、雪の色に隠れることが出來ぬのみか、却つて、人間の身體は雪の中に目立つと云ふ困難があり、又第二には、怎麼にしても、雪には足跡が附くのであるから、進退出入共に、此の爲に人に看破されるの餘儀無きに到るのである。そこで、雪遁の術に於ける内容は、他のすべての遁形の術と趣を殊にして如何にして雪を利用せんかの問題は、其の小部分を占めつゝあるに過ぎず。他の大部分は、如何にして雪の中で人目に立つことを避けんかの問題を研究するに在るのである。

そこで、忍術に於て雪を利用する場合は、大雪の爲に油断をしてゐる人間を襲撃するか、咫尺も見えぬ大吹雪に乗じて事を行ふか、ほんのたまにしか無いのであるが、雪の中で人目に立つことを避ける方法は、縦令少しの雪でも、忍術を行ふ際に雪が降りさへすれば、必ず講じなければならぬのである。無論夜分の事として、雪の爲に地面が白くなつてゐる場合に忍術を行ふには、外套風

に長く上へ羽織る着物に口傳がある。それは、表を黒か紺か、若しくは茶の極濃いのにして、裏の全部を白にし、便宜それを裏表共に着られる様にして置いて、雪の上では裏を外へ出し、屋内其の他雪の無い所では、手早く引っくりかへして表を外へ出すのである。之を稱して、

黒布に鴉を繡ひ白紙に鷺を繪く法

と云ふ。又、雪の上の足跡を晦ますべく、草鞋を逆に穿くことを、

東面西行の術と云ふのである。

ウ 隱身遁形の術の科學的解説

忍術に於ける隱身遁形の術が、決して催眠術が、つたものでなく、無論又所謂魔術妖術の類でもないこと云ふことは、前にも既に斷つた所であるが、以上、表五遁裏五遁の十法、及び、天地人三遁の三十法を、逐一解説した所に依つて、

讀者諸君も、成程忍術と云ふものは、物理的、心理的、且つ數理的のものであると、會得せられたであらうと思ふ。古への所謂魔法妖術は、催眠術の或る種類で、近代でも、印度の魔術師が、劇場に於て、多數の歐羅巴人の前に大蛇を現し、満場を驚倒せしめたが、其の際、寫眞器を持つてゐた一歐羅巴人が、背景と共に其の大蛇を寫眞に撮つたら、實際は有りふれた普通の小蛇であつたと云ふ話がある。要りこれは、鍛錬された特殊の精神の能力を以て、公衆を催眠術に掛けた例なので、忍術はこれと違ひ、如何なる場合にも心理と物理とを相伴はしめないことは無い。何人にも出來得る事を詮じ詰めて、結局は神秘靈能に備しい異常の効果を擧げるのが忍術なのである。尤も、忍術に於ても、一種の自己催眠が必要であり、又、所謂精神統一と備しい方法を一半と爲して、これと他の一半のものを併せた練習法も無いでもないが、それとも、純然たる催眠術とは異り、無論、魔法でもなく妖術でもない。これは、次の「心意的方面」

の部の、『精神と身體とを併せての統一』、及び、『結印呪文の事』の條に於て精しく述べるが、返すくも、忍術に於ては、左道邪法と云つて、魔法妖術が、かた事を排斥してゐることを記憶しなければならぬ。

扱て、催眠術的臭氣をも帯びず、魔法でもなく、妖術でもないとするれば、結局、忍術に於ける隱身遁形の術は、物理的に解説せられなければならない筈である。そこで、此の條に於ては、隱身遁形の術に對する科學的解説を試み様と思ふ。要するに、隱身遁形の術を詮じ詰めて、其の精髓に到ると、對者即ち己に對する人間の眼の働きを、科學的研究の結果に依つて利用するに在るのである。即ち、人間の物を瞞める働さと云ふものは、眼の網膜の中心にあるのであるが、それが猫や何ぞとは異つて、黒闇では些とも役に立たぬものである。そうして、黒闇でも利くものは、ぼんやりと物の輪廓を見る所の、網膜の周囲の働きだけである。だから、黒闇の中で何か訝しい物を認めたとする。それが

即ち、物の形の輪廓だけが、ぼんやりと網膜の周囲に映つたのである。そこで此奴腑に落ちぬと思つて、確と見直す氣になると、今度は、物を瞞める役目を持つ所の、網膜の中心が働き出す。すると、今云ふ通り、網膜の中心は些とも黒闇で利かないものであるから、現にぼんやりと見えたと思つた物が、其の儘消え失せた様に見えなくなつて了ふ。此の眼と云ふものに賦與された能力を利用して、先づ漠然として異形の物を一方に見せ、不思議と思ひ、瞞める氣で、網膜の中心を働かせ様とすると、それが却つて消えて見えなくなると云ふ、必然の生理的作用に乘じ、其の人が疑惑に囚はれてゐる中に、虚實の轉換を機敏に行ひ、人か魔かと驚慌せしめて、其の間に進退出沒の目的を遂ぐるのが、隱身遁形の術の極意なのである。

恁ういふ風に隱身遁形の術を解説したら、何人も其の極意を悟るに苦しまざるべく、既に其の極意を悟り得たら、人々の研究工夫に依つて、隱身遁形の術

を行ひ得ないこともあるまい。隱身遁形の術は、己れを救ひ人を救ふの用に供して、頗る有効なるものである。

四 忍術の形體的方面に於ける無色無臭

無聲の極意

イ 無色無臭無聲とは何ぞや

既に隱身遁形の術を説いたから、今度は、百尺竿頭一步を進めて、無色無臭無聲の極意に入らなければならぬ。而も、此の段の鍛錬は、隱身遁形の術を研究するに先だつて、遣り始めなければならぬもので、而も、隱身遁形の術を研究し抜いた後に到り、初めて其の宜しきを得るのであるから、之を隱身遁形の術の後に置いたのである。

然らば、無色、無臭、無聲の三無は、忍術に於て何を意味するものであるか

と云ふに、無色とは、形體色相の目に立たぬを意味するので、即ち、隱身遁形の術が功を奏した結果である。又無臭とは、身體から人間臭い香を發せぬ様に、鍛錬し得て功を奏した結果。無聲とは、呼吸をするにも音を立てず、歩くにも足音を聞かせぬ様に、矢張り鍛錬し得て功を奏した結果である。

尤も此の三無は、劍道、柔道の方にも必要であり、鳥獸を狙ふ獵夫、魚類を捕る漁師にも、亦缺くべからざるの條件である。別けて、鳥獸に對する獵夫と、人間に對する忍術者との間には、多くの共通の點があるのであるが、獵夫が野獸の注意を避ける練習と、忍術者が官能の鋭敏な犬に咎められることを避ける練習とは、略ぼ同じ事で、其の上更に、忍術者には人間の注意を避ける練習があるから、獵夫よりは一層困難と云はなければならぬ。

ロ 無色の極意

これは、隱身遁形の術の部に於いて述べた所を、十分に味ふと、自ら會得

されるので、要り、物理的、心理的、且つ數理的に、虚實を轉換して對者の注目を避くる方法に在るのである。此の方法を十分に練習し了ふは、極度に鍛錬し抜いた所に結果するものが、即ち無色で、對者の注意の燒點を、常に自己の實體と正反對の所に引き着けるのが、即ち無色の極意である。なほ、端的に對者の視覺を奪つて、己れの形體を見ることが能はざらしむるも、亦無色の極意の中で、それには、蛙の卵を黒焼にした粉を風上で振れば、風下にゐる者の目が晦むと教へてある。眠れる者の面上に振り掛けて、覺めても目が急の役をしない様にするも、同じ方法である。

ハ 無臭の極意

無色よりも、更に問題のむづかしいのが無臭である。人間の身體には必ず臭氣がある。さうして、それには、

(一) 人間に共通の臭氣。(即ち人臭い香)

(二) 男女各別に共通の臭氣。(即ち男臭い或は女臭い香)

(三) 個人々に特有の臭氣。

の三種あることを認めなければならぬが、先づ第一の人臭い香は、人間同士にはそんなに著しく感じないが、丁度、人間が鳥や獸の臭氣を激しく感ずる様に、忍術者の大敵たる犬の鼻には、遠くからでも人間の臭氣が判るのである。それから、所謂異性の香なるもので、男臭い香は女に好く判り、女臭い香は男に好く判る。又第三の個人々に特有の臭氣は口中の香、腋香、皮膚から分泌されるもの、香等で、腋香などには色々の種類があり、皮膚の分泌液——別けて汗の香には、甘い様なものや、酸っぱい様なものや、其の他種々の別が認められる。

以上の次第で、忍術者は、首尾好く其の形だけは隠しても、其の身體の臭氣の爲に、犬は勿論、人間の鼻にも怪まれる様では、一向其の役に立たない事に

なる。これには、忍術を行ふ場合に臨んで、成るべく風上を避ける態度を取る事の注意もあるが、第一には、身體の臭氣を薄くする修行が肝腎である。

それには、先づ酒を飲まぬ事である。酒を嗜む者には身體に飲酒家の特殊の臭氣がある。これは、酒嫌ひの者には餘程激しく感じられる。そこで、獵夫でさへ、眞誠に理想的の獵夫となるには、決して酒を飲んでならぬとの戒めがある。風上にゐると、二三町離れた所の鹿が、此の臭氣を嗅ぎつけて逃げるさうである。それでも、鹿を撃つ獵夫は、相當の距離から飛び道具を用ゐるから、まだしもであるが、忍術者は、時として敵の鼻面を掠めて通らなければならぬこともあるから、酒を飲むことは獵夫以上の禁物である。況んや、犬の外にも、酒嫌ひの鼻の感覺の鋭い人間に嗅ぎ分けられる虞れがあるをやである。

それから、酒と共に煙草も亦禁物である。煙草好きの者にも亦一種の臭氣があつて、犬や、煙草嫌ひの者に嗅ぎ着けられるのである。矢張り、獵夫でさへ、

其の理想的のものとなるには、煙草を喫んではならぬとされてある。然るを、煙草を喫むにはゐられないと云ふ者に、怎うして忍術者となる資格があらう。

なほ其の他に、葷い葱類のもの、香氣の高い野菜物や果物、山椒、からし、蕃椒、胡椒、薑、山葵の類の辛い刺激性のもの、過度に鹹い物、過度に酸っぱい物、鳥獸の肉、腥みの激しい魚、油の濃い物などを食ふのは、すべて身體に臭氣を加ふる所以となるから、眞の忍術者は、成るべく淡白な物を取るので、殆んど菜食主義と一致してゐる。

斯くて、酒も飲まず、煙草も吸はず。葷い物や、辛い物や、腥い物や、油濃い物も食はず。それに依つて身體の臭氣を薄くした上に、成るべく汗を出さぬ様に、身體を中心から丈夫にし、温浴を避け水浴を取つて、皮膚を強め、且つ、汗の原料となるべき湯水を多く飲まずとも、我慢の出来る様に習慣を養ふのが、忍術に於ける無臭の目的に叶ふ練習なので、風下にゐる犬にさへ自分の

臭氣を嗅ぎ分けさせないのが、無臭の極意を貫いた効果である。

二 無聲の極意

無聲は無臭よりも更にむづかしい。即ち、如何なる場合にも息をする音を漏らさず。又、如何なる場合にも歩く足音を人に聞かせぬ練習である。忍術ではこれを調息整歩の術と云つて、非常に重い事としてゐる。

先づ調息の方から之を述べ様が、これは、平生鍛錬を積んで、呼吸を極めて深く穩かにし、仕舞ひには、鼻頭に鴻毛を掛くと云つて、鼻の先に鳥の毛を吊り下げて、それへ息を掛けても、軽い鳥毛が揺るがない程に、十分練習し抜くのである。而も其の練習の方法は、所謂丹田呼吸で、口や鼻で息をせず、臍の下で息をする心持で、息を吸ふ時には、ぐつと下腹を張つて、臍の下へ息を吸ひ込む様に、引く息を短く、鼻で音のせぬ様にし、さうして、吐く息の時には、最初ぐつと張つた腹をば、今度はそろりと凹ませて、細く長く且つ穩かに、綿々と音のせぬ様に吐き出すのである。真人は踵を以て息をすると云つて、古の支那の道術家は、呼吸を調へるには、注意の焼點を足の踵に置いて神氣を鎮める様に練習したものである。身體の中の最底部たる足の踵に注意を置く様にして、始めて真誠に深く穩かな丹田呼吸が出来るのである。それから、此の調息の練習が段々進むと、駆足をしたり、身を躍らしたり、力を出したり、高い所へ登つたりしても、息が弾んで荒く音を立てない様に、平生鍛錬しなければならぬ必要がある。已むを得ない時には、袖或は手拭の様なものや鼻口へ押當て、息の弾むのが鎮まる迄の間、其音の漏れない様にする教へもある。なほ、此の問題の範圍に於ては、寝てゐて鼾聲を掻かない練習が肝要で、これには、大きく口を開いて寝ることが大禁物である。口を結んで寝ると、息を深く穩かにするのとの、二つの練習が相俟つた結果は、殆んど寝てゐるか死んでゐるか見別難い程に出来るのである。

更に、調息と相俟つての必要な事は、忍術者たる者は、決して風に引いてはならぬのである。語を換へて云へば、風を引く様な人間は忍術者にはなり得ないのである。斯くて、忍術者たるべき資格の一つとして、風などを引かぬ様な強健の體質を必要とすると共に、風を引かぬ様に注意するのが肝腎である。何故かとなれば、風を引く者は先づ「嚏」をする。忍術を行ひ乍ら「はッくしよい」と激しく遣つたら、隠身遁形の術も何もあつたものではない。何も蚊も其の一聲と共に御仕舞にならうではないか。それから、風引に一般の徴候は咳をする事である。忍術を行ひ乍ら、頻りに「こんく」遣つたら、是亦「はッくしよい」と同じく、何も蚊もおちやんにされて了はなければならぬ。故に、忍術に於ては、直ちに風を引いてならぬとの戒めは無いが、決して「嚏」と咳とをしてならぬと云ふことを、特に注意してゐるのである。「嚏」をする人、咳をする人は、忍術者となる資格が無いと定められてゐるのである。肺病其の他呼吸器病

患者は、無論問題外として、其の他咳をしたり嚏をしたりする者は、風を引く人間に限る。だから、風を引く者は忍術者たることが出来ない。風を引き易い者が引けないのみならず、絶対に風を引かない者でなければ引けないのである。

次には、整歩の方の問題であるが、忍術者たる者は、些かでも歩く足音を立て、は引けない。整歩の術、一名を、

無足の術

と云ふ。足の無い幽霊が、すうツと宙を這つて、出たり入つたりすると同じく、緩急共に微響をも帯はずに進退する様に、十分鍛錬々習の功を積まなければならぬのである。

それも第一は、真人は踵を以て息をすると云ふ事と同じく、注意の焼點を足に置いて、丹田呼吸——即ち臍の下を根據にして、深く穩かな息をする練習に

在り、以て、神氣を沈着かせると共に、腰の据わりと身の構へとを好くするのである。さうして、足音を静かにする口傳としては、左の二法がある。

(一)足を進める時、足の指をぐつと反らして、踵を少し上げる氣持にし、足の裏の中、土踏まずと指との間の、圓味を帯んで隆まつた肉を、柔んわりと前より加減に、地面へ押附ける様にする。

(二)忍びやかに抜き足さし足をする場合には、先づ息を吸ひ乍ら一方の足を進め、それを地面に降して確と落着けてから、今度は息を吐き出して、次に又息を吸ひ乍ら、他の一方の足を進め、地面へ落着けてから又息を吐く。恚うして、何所迄も呼吸と足取りとを一致させるのである。又、急いで歩く時ならば、引く息に一足、吐く息に一足と、これも、一步宛呼と吸とに伴ふ様にして、息と足取りとの不一致を避けるのである。無論、此の際も丹田呼吸である。

(五) 忍術の心意的方面

イ 忍術に於ける心意的方面の概説

忍術の心意的方面とは、研究の便宜上、形體的方面と區別したものであるが、これには、「精神と身體とを併せて統一する練習」を始めとして、「人を謀る騙引」即ち權謀術數の類、乃至間者を用ゐる手段、又「觀相術」及び、言語、舉動、面色に依つて、對者の情偽を察知する所の「人心觀破術」、「天候氣象を前知するの智識」、「旅行に關する種々の重要な心得」、「言語、風俗、人」等を模擬する意匠、「物品、家畜、愛翫の動植物等と、其の所有主若しくは使用者との關係の鑑識」、「事ありたる場所と、事を行ひたる人間との關係の鑑識」等から、一種の自己催眠に資すべき「結印呪文の法」などを含んでゐる。

而も、元來忍術に於ては、形體的方面と心意的方面とを、劃然と離して見る

べき場合が極めて稀なので、形體的方面が表になつてゐる時には、心意的方面が裏となり、又、心意的方面が表となつてゐる場合には、形體的方面が裏になるのみならず、其の表裏何れかの一面に於てさへ、形體的方面と心意的方面とが相混じてゐる場合も少くないのであるが、之を研究する場合には、一々両面を別けて見ることが出来るのみならず、同時に、両面を別けて見ることによつて、益々両面の複雑なる關係を會得することが出来る。さうして、両面を別けて見ることが研究上の便宜である。

ロ 精神と身體とを併せての統一（質に於ては尋常一様、量に於ては神秘靈能）

忍術に於ては、隱身遁形の術を行ふに當つても、亦其の目的を遂行するに當つても、何より第一必要な事がある。それは何であるかと云ふに、精神と身體とを併せて統一するの修行である。

世には精神統一と云ふ事がある。それを十分に遣り抜くと、異常の精神作用を起して、念射だの、透視だの、催眠作用だの、感應作用だのと、種々の神秘靈能を善くする様になり得る例が、世上にいくらもあるのである。而も是れ、精神のみを一方に傾注凝結せしめた結果なので、恚ういふ事を善くする人は、殆んどすべてが精神と身體との調和合致を失ひ、病的になつたり、狂的になつたり、或は自殺をしたり、或は早死したり、さうでなくとも、常を失つた不幸な生活をしてゐる者である。故に、忍術者には決して恚ういふ精神統一の必要が無いのみならず、寧ろ、恚ういふ精神統一を練習して病的な人間となることを避けなければならぬが、併し、精神統一に止まらずして、進んで、精神と身體とを併せて統一して、意思と行動との間に、時間空間共に一秒一毫の間隔無からしめ、以て我なるもの、全部を、目的に向つて突進没入せしめつゝ、其の爲す事の性質は尋常一様でも、爲し得た分量に於て、神秘靈能に齊しい効果を擧げ

るのが、忍術者の取るべき道なのである。

忍術に於ては、精神と身體とを打して一丸と爲すの鍛錬が必要である。精神と身體とを併せて、唯だ一つの焼點を作る事が必要である。精神の發動と身體の發動との間に、薄紙一枚程の隔りがあつても可かぬ。精神の突入と身體の突入との間に、瞬き一つする程の違ひがあつても駄目である。精神ばかり統一しても、身體が之に伴はなければ、忍術は行はれぬ。又、身體は如何に豹の如く狒々の如く活動しても、精神が之と完全に合致して働くのでなければ、矢張り忍術は出来ないのである。之を極めて卑近な譬に當て箴めて見ても、今こゝに數十丈の絶壁と絶壁との間に架かつた、幅一尺餘りの一本橋があるとす。若し其の三間乃至五間の、面を平かに削つた、幅一尺餘りの材木が、平地の上僅かに一二尺の所に架け渡されたのであるならば、誰しも、其の上を早足或は驅足で渡つて、途中で落ちずに向へ渡り越すことを難しとはせぬだらう。然る

に、それが數十丈の絶壁の、而も、藍を湛えた様な深潭か、雪を飛ばす様な奔流の上に横たはつたものとなると、先づ、殆んどすべての人は、目眩めき、股慄れて、一步も進めることが出来ないと言ふのは、怎う云ふ譯であるかと尋ねるに、それは、精神と身體とを併せて統一することが出来ないからである。答へなければならぬ。若し此の時に當つて、精神と身體とを打して一丸と爲しつ、唯一つの注意の燒點を作つて、それを一本橋の真中に置き、而も、身體の行動がそれと相俟つて毫厘の間隔も無かつたら、數十丈の絶壁も、藍を湛へる深潭も、雪を噴く奔流も、共に眼中に無く、矢張り、地上一二尺の所に架け渡された材木を踏むと同じで、何の苦も無くするゝと歩みを進め得られる筈である。いや、必ずそれが出来るのである。又之を相撲に譬へて見るに、力士には、力量が十分にあつても、出足が遅い爲めに、引落されたり、はたかれたり、若しくは、敵を突き出し乍ら前へのめる者がある。これは、精神と身體の一部と

を統一し得て、意思と體力とを腕及び上半身にだけ集中しても、下半身だけが統一の外にあつて、意思の發動にも随はず、身體の突進にも伴はないからなのである。此の時若し身體との統一が遺憾無く行はれて、我なるもの、全部を力に於て突進せしめたならば、必ず適を土俵の外へ突出して、而も、我には過ちが無く、所謂出足の早い効果を收め得られるであらう。

然らば、身體と精神とを併せて統一し得る様になるには、怎麼練習をすればいゝかと云ふに、古には、吐と息を詰めて、我慢し得る限り長く、全身に力を籠める方法がある。憊うすると、精神も必ず内部に向つて、息の凝ると共に凝りつゝ、身體と共に緊張するので、即ち精神と身體とを併せて統一しての緊張になる。此の時には、四肢五體の幹枝残らずに力を満ち渡らせるので、我なるもの、全部は、張り切つた一つの力になる。さうして、此の練習を一日三十回宛三百日間、併せて九千回行ふと、精神と身體とを併せて統一するのが習慣

性となつて、事に當つて直ちに之を應用することが出來、怎麼至難な事でも、寧ろ不思議に屬する事でも行ひ得ると教へられてある。

但、此の精神身體とを併せて統一する練習は、忍術に於て極めて重要な事であるが、これこそ、心意的方面と形體的方面とを打して一丸と爲して、表も無く裏も無くしたものであるから、純然たる心意的方面でもなく、勿論又、純然たる形體的方面でもなく、單に心意的方面と云つても、又單に形體的方面と云つても、六に當らないのであるが、併し、世間ある所の精神統一と云ふ事が土臺で、それより一步進めた所の、精神と身體とを併せて統一するの域に入るのてあるから、之を心意的方面の部に置くのが妥當であらうと思ふ。

ハ 地方々の言語、風俗、人情を模倣する事

これは、「形體的方面」の項、「ハ」の條に、「變裝術及び變相術に伴ふ諸種の重要な研究」と題して、述べた所であるから、重複を避けて、こゝには、右の

條を参照せらるべきを注意して置くだけに止めるが、地方々々の言語、風俗、人情を模倣し得て、それを應用することは、固より「形體的方面」の部であるが、それを研究するに苦心慘澹を要する事と、又、之を研究するに、特殊の長所を持つた頭腦を要する點とは、云ふ迄も無く「心意的方面」の部でなければならぬ。

二 天候氣象を豫知する練習

天候氣象の變化を豫知し得た結果を應用したものは、即ち天道十法の隱身遁形の術で、「形體的方面」の部に屬するのであるが、それを豫知する智識を養ふ事になると、「心意的方面」の範圍内でなければならぬ。

これには、今日に於ては、天氣豫報を司る學者と、同じ専門の科學的及び器械的智識を吸収する必要のあるのが勿論であるが、又、山中の人、海上の民等の、累代の經驗を重ねて、自分の何十年間の實地研究の功を積んだ所説をも、十分に參考に供しなければならぬ。古へ、富士山の下、原、吉原あたりの松

蔭に住んでゐた老女があつて、明日の天候を豫言するに、百發百中、まことに神の如きものがあるので、或る西國の大名が、厚祿を以て強て之を招ぎ、自分の城下に連れて行つて、天氣豫報を試みさせたが、今度は不思議な程薩張り當らない。そこで、怎う云ふ譯けてあらうと思つて、段々調べて見た所、此の老女は、娘時代から、自分の家の後に峙つ富士山に注目する經驗を積み、朝、晝、夕、夜と、刻々に變り行く其の色合、其の遠近濃淡の見え様、それに雲の懸かり様などに依つて、四季に於ける天候の變を卜するに、中年以後に到る迄には、富士山と氣象との關係の有らゆる現象を残り無く幾度も經驗し盡くしたので、遂に、富士を見て天氣を豫言するに、決して誤り無きを得るに及んだのであつた。所が、其の老女が俄に西國の或る城下に移されて、天氣を見様と思つても富士山は見えず、已む無く、城下から餘り遠くない所に見える高い山を頼りにして、富士山で得た經驗をそれに應用して見たが、怎うも、富士山と其の山との

位置が二百里餘り離れてゐる上に、高さも富士の半分ぐらゐしかないのであるから、富士を度る尺度はそれへ當て依められず。其の爲豫言が當らない事と判つたさうである。恚ういふ例は、山中や海上にいくらもあるもので、其の土地土地の人々の何代も重ねた経験の結果を聞くことは、時として、學問や器械の力に俟つた天氣豫報に打ち勝つことがあるのである。

そこで、こゝに掲げる古への忍術者の天氣を見る方法は、亦是れ、古への忍術者の方法としてのみ聞くべきものに止まらずして、同時に、今日の諸君及び我々に對しても、參考とならぬこととはあるまいと思ふ。

以下は、忍術に於ける日和の見様であるが、獨り忍術に限らず、何の道にもこれを應用することが出来るのである。

(一) 雨の事

夜の九ツ時(今十二時)、晝の五ツ時(八時)、七ツ時(四時)より降り出だしたる

は長雨也。

又、晝の四ツ時(十時)、六ツ時(六時)の降り出だしは、少しの間にて日和になる也。

夜の五ツ時(八時)、七ツ時(四時)、晝の九ツ時(十二時)の降り出だしは、はら／＼雨にて早速歇む也。

晝の八ツ時(二時)、六ツ時(六時)、夜の四ツ時(十時)の降り出だしは、僅かに半日ばかりにてあがる也。

(二) 風の事

東風は雨になるべきものなれども、入梅と土用とは、降り續きたる雨もあがる也。

東風急なれば夜の晴を司る也。

春夏に西北の方より吹く風は雨の徴也。

秋西風吹くは必ず雨也。

冬の日南風吹くは、三日に霜を司る也。

西風、北西風は日和、東風、南風は雨風也。

日の没、赤か青かは風也。鱗雲は雨、夕雲赤きは晴れ、雲亂れ飛ぶは大風、

風雲跡無きは風歇む。雲の色紅白なれば又大風也。

夜霧降れば翌日大風也。

流星東へ飛べば風也。南へ飛べば晴、西へ飛べば雨也。

月の出に色白きは雨也。月の暈に星あれば雨也。暈重なれば、大風也。月

の入に光強きは雨、色白きは風也。

朝虹西にあれば、三日の中に雨也。夕虹東にあれば日和也。

電四方にあるは風雨也。

(三)物に依つて風雨陰晴を知る事。

雨降らんとしては礎濕ふもの也。

山あざやかに見ゆる時は陽風也。又、山隠れて見えざれば陰風也。

風無くして山近く鮮かに見ゆるは雨の兆也。

鴉水を浴びるは必ず雨の徴也。

鳩鳴いて返す聲あらば晴也、返す聲無きは雨

を催す也。

朝に鳶鳴けば雨也。夕に鳴けば晴也。又、鳶

輪を描いて舞ひ上がるは晴れにて、輪を描い

て舞ひ下がるは雨也。

竈の煙もや〜として下へさがらば雨と知る

べし。直に立のぼりて滯らざるは晴也。

出雲入雲にて日和を見るは、國々に依りて事替れり。大阪地方にては、雲



の脚丑寅の方へ行くを入雲と云ふ。雨になる也。又未申の方に行くを出雲と云ふ。これも雨になれども、風強く吹く時は日和になる事あり。

(四)日に依つて天氣を見る事。

天一太郎、八専次郎、土用三郎、寒四郎といふは、天一天上が朔日に當るを天一太郎と云ひ、八専に入つて二日目を八専次郎と云ひ、土用に入つて三日目を土用三郎と云ひ、寒に入つて四日目を寒四郎と云ふ。何れも、これに當る日に雨が降れば、天氣悪しくなるもの也。

(五)國々に依つて天候の變る事。

天氣時候は國所に依つて變る事ある故に、一概にも言ひ難し。大凡關東は西風にて晴、東風にて雨降る。之に反して、關西は東風にて晴れ、西風にて雨降る也。依つて、土地所に應じて聞合せ、考ふべし。

(六)天氣覺えの歌

筑波晴れ淺間曇りて鴈鳴かば雨は降るとも旅もよひせず。

五月西春は南に秋は北いつも東風にて雨降ると知れ。

春北風に冬南いつも東は定降の暮雨。

ふつきりはてつきりたつきりふつきり。(ふつきりとは降霧を云ひ、てつきりは照霧、又たつきりは立霧也。其の意味は、霧の降るのが天氣の上る徴で、霧の立つのが雨の降る徴と云ふ也。)

ホ 地望的方面及び旅行に關する素養と實用

これも、『心意的方面』と『形體的方面』と相俟たなければならぬのであるが、忍術に於ては、旅行に關する地理上の種々の心得が重要である。

忍術の秘傳として、道路の鑑定法があるが、有繋特殊のもので、唯問いて見るだけでも頗る面白い。

本道と支道とを、日中は勿論、闇夜でも識別するには、靴、草鞋、牛馬の

沓、牛馬の糞等が多くあるのは、即ち本道の徴で、それ等の少いのが支道。又、土沈みたるは人の多く通る道で、土の浮きたるが人通りの少い道。それから、土を舐めて見て鹹味を覺ゆるは、人通りの多い道で、苦味を覺ゆるは人通りの少い道。

と教へてある。此の中、土を舐めて見るとは、如何にも忍術的で面白いではないか。

それから、路を歩き乍ら、町か村かの兩側の人家の數と、其の空屋の數とを、仕分けて算へる面白い方法がある。

それには、双方の袂へ、豫め數を定めて、赤小豆を多く入れた紙袋と、大豆を少し入れたそれとを、各一つ宛、即ち左に二袋、右に二袋と、都合四袋を入れ置き、往來を歩き乍ら、素知らぬ顔をして、左に一軒あつたら、左の袂の小赤豆を一粒棄て、右に一軒あつたら、右の袂のそれを一粒

棄て、又、左右何れかに空屋があつたら、其の方の袂の大豆を矢張り一軒に一粒宛棄てるのである。さうして、其の町なり村なりを通り過ぎた上で、残つた赤小豆とを算へ、以前にあつた數からそれを引いて見たら、左側の人家が何軒で、空屋が何軒、右側の人家が何軒で、空家が何軒と、勞せずして正確なる數を知り得る譯である。

これも、地理的方面に關しつゝ、忍術者が使用する方法の一つとして、記憶すべき價値のあるものであらう。

なほ、忍術者が平生誦する所の、旅行教訓歌四十二首なるものがある、これは、普通人の参考としても有益のものであるから、左に記す所を注意して讀まれない。

定め得し旅立つ日どり吉凶は思ひ立つ日を吉日とせむ。

初めには草鞋をえらび緩々と度々休み路急ぎすな。

宿とりて一に方角二雪隠三に戸じまり四には火のもと。
宵の中に朝の始末を附け置きて立ち仕度して膳に向へよ。
道中は自由をせんと思ふまじ不自由せんとすれば自由ぞ。
長旅の道具は兎角少きをよしと定めよ多きのは憂き。
道中の事を手輕にする人は川留故障あれど安全。
案内を知らぬ土地にて宿取らば家作の好くて般やかな家。
早く立ち早く泊ると云ふ人は旅にて難は無きと知るべし。
道中は兎角暑寒に氣を附けて中らぬ物を控へ目に食へ。
道中は一度に物をしたゝめず休みゝゝていくたびも食へ。
道中の食によしあし云ふ人は土地も所も見判かぬと知れ。
それゝゝに所の風土を味はひて食へば悪しきものも結構。
上戸でも旅で大酒はすべからず折々少し飲めば良薬。

空腹で風呂には入るな殊の外草臥たらば熱き湯に入れ。
道中で慎むべきは色慾を殊に暑中の賣女大毒。
渴きても知らぬ山路や谷川の水は飲むまじ薬にて飲め。
疲れても路邊草叢森の中休みて睡る事は禁物。
食後には路を急ぐな大小便憶えて乗るな馬駕籠車。
旅先でたとへ急げど知らぬ川知らぬ近路慎みてすな。
しかれども川や近路若しあらば後のたよりに聞き知りて置け。
船渡し川越しなどをする時は心を附けよ荷物に財布。
出水の川はたとへば小川でも輕んじ渡ることは劍呑。
霖雨の後にて山岸を行かば氣附けよ崖の崩れに。
霖雨の後にて山岸の巖の下や川岸の崖に臨める家に休むな。
假初の船路を行かん旅ならば遅速の程を考へて乗れ。

船中の板子や竿に目を附けて豈夫の時は持つて波間へ。
 船暈は小便呑めばなほなるなり強き醋一口飲むも亦好し。
 雨降る日あかるくなれば宿かりよ暮れて泊ればよき宿は無し。
 道中は家來眷屬ありとても一人で物をする勝にせよ。
 道中で見得飾りする人達は必ず難に遭ふと知るべし。
 路連にせまじき者は取別けて持病ある人大酒色好き。
 泊りにて若しや近火のある時は立仕度して後に荷を出せ。
 物云ひを旅では殊に和げよ理窟がましく聲高にすな。
 得たりとて旅で出だすな我が技を隠さぬ人は難に遭ふぞや。
 馬方や荷持雲助侮るな田舎の風を嘲り顔に見な。
 腹の立つ事をも旅は懐えつゝ云ふべき事は後に断れ。
 道中で小唄淨瑠璃口占み行くを後より附けて歌ふな。

道中で立ち寄り見まじ變死人喧嘩口論博奕碁將棋。
 相宿の者に氣を附け何事も油断をするな變に備へよ。
 道中で知りたる者に薬など勧められても平に断れ。
 宿立たば持つべき物を相互忘れぬ様に氣を附けて遣れ。

へ 鑑識に関する方面

忍術者には、物を鑑識する適切な智識と、その精透な眼孔とが必要である。
 假令ば、物品、家畜、愛翫の動植物等と、其の所有主若しくは使用者との關係を
 鑑識する事、若しくは、事があつた場所と、事を行つた人間との關係を鑑識す
 る事などは、忍術の目的を遂ぐる助けとして、頗る重要でなければならぬ。さ
 うして、此の段の問題は無論探偵術の畵に屬するのであるが、應用の範圍は甚
 だ廣く、戦争は勿論、日常の事業職務にも、對人關係にも、生活問題にも、其
 の他萬般の事に應用する事が出来るだらうと思ふ。

豊臣太閤が、諸侯の佩刀の殿中に脱してあるものを見て、人々の性格氣質から其の好みを推し、これは江戸大納言(家康)の物、これは加賀大納言(利家)の物、これは安藝宰相(輝元)の物、これは備前宰相(秀家)の物と云ふ様に、一々残らず云ひ當てたと云ふは、有名の話である。

朝鮮陣の折、黒田長政其の他諸將の一隊が、或所で、兵を進め様か進めまいかと軍議の末、一同の意見で、後藤又兵衛基次に斥候の役目を任せ、前方にある川を渡つて、それから先の様子を探りに出したが、馬を飛ばして行つた又兵衛は、間もなく引返して来たので、怎うした事かと怪しんで問ふと、いや、川を渡つて見る迄も無く、只今川の岸迄参つて見たるに、川上より日本の馬の草鞋が流れて参つたり。是れ、一方の日本軍が先んじて川を渡りたる印、斯く後れたる上は、遠くの敵状を探る迄も無く、片時も早く軍を進めては叶ふまじと答へた。是等は、物と人との關係を機敏に鑑識し得た効果を語るものとして、

適切の例の一つであらう。

古今の名探偵の物語には、此の問題に關する参考の材料として、擧ぐべきものが幾個もある。併しこゝには興味を主として、コナンドイルの「名犬物語」中の一部分を引用しやう。

「どうだね」と僕は一生懸命になつて友の平常の觀察法を真似ながら」ともかく、此の Dr. Mortimer……ドクトル、モルチマとか云ふのは立派な老醫師だ。友達がこれだけの立派な杖を贈つて敬意を表した所から見ても、たいしたものだよ。」

「うまい」とホルムズ「流石にだ。」

「それから此の老醫師先生は田舎のお醫者さんで、よつほど勉強して徒歩で患者を見廻つたらしいね。」

「どうして?」

「そりや、君。此の杖はもとは餘程立派なものだつたらうが、尖が這
麼に突き減らされて居る以上は、どうしたつて町醫者とは思はれないから
ねえ。此の厚い鋼鐵の金箱がかうまで禿るには、随分てくく、てくりつ
けた後でないと見られない現象さ。」

「しつかりした推理だ」とホルムズ

「それから、茲に friends of the C.C.H. . . . the C.C.H. の諸友とあるが、H
は Hunt か、何か遊獵會の俱樂部員か杯が、特別に醫者の好意を受けた爲
その感謝として贈つたものらしい。此の杖は屹度、その紀念品さ。」

「ワトソン君、うまい。今日は日頃の君とは思はれないよ。」

とホルムズは椅子を後に押しながら、巻煙草の火を點けて、

「さうやつて君がどしどし推理の歩を運んで呉れるところを見ると、今迄
の君はどうやら才能が認められて居なかつたと云ふもの、僕は習慣的に君

を侮蔑して居たよ。悪かつた。よし君自身輝かな光體でないまでも。君は
優に光を點火したり導いたりする技倆を具へて居る。つまりある種の間
は、自分に天才を持つて居ないでも、他の天才を刺戟し發揮させることに
非常な力を與へて居るものだ。僕は今改めて感謝と白狀とを君に捧げま
つるが、僕の推理は頗る君に負ふ所があるよ。」

彼はこれまで這麼ことを云つた事は一度も無い。で僕は一種の快感を感ぜ
ざるを得ない。實は僕は日頃から、折角、彼の爲に記録を書いて世間に彼
の探偵談を紹介してやるにもか、はらず、一向僕の好意を認めないで平氣
の平左衛門で居るのが少々癪だつたが、今度ですつきりした。それに、ど
うやら彼の賞讃を贏ち得るまでに、僕は彼の推理法を會得したかと思ふと、
自慢して見たい様な意識も起る。彼は早速僕の手から杖を奪ひとり、暫ら
く肉眼で凝視めて居たが、聽て、面白いと叫んで、煙ゆる巻煙草を側に置

き凸面鏡を把つて杖を精査し出した。

「まづ幼稚な程度だが、面白いよ。」と云つて、彼は樂々椅子に凭りかかりながら「とにかく此の杖に一二點確な推理上の基礎があるよ。そこからいろいろ想像を飛ばすさ。」

「僕の推理以上にまだ餘地があるのかね」と僕は頗る得意になつて「僕の此の杖から推理し得られることは一切推理してしまつた心算なんだがね。」

「オイ、オイ、ワトソン君。お氣の毒だが、君の推理は先づ全部間違ひさ。僕が君に僕を刺戟し、指導して呉ると云つた意味はね。有體と云へば、君の間違ふ所を参考にして、僕は眞理に達することが出来るよと云ふ意味さ。もつとも君の推理は絶對に誤つて居るとは云はないよ。田舎の醫者で、よく歩くと云ふ事だけは疑ふべくもない。」

「ぢや、僕は正しいぢやないか。」

「其の點まではね。」

「それで全部ぢやないか。」

「いや、どうして。それが全部で堪るものかい。まづ一例を云へばさ。此の杖は遊獵倶樂部の贈り物ぢやなくて、HospitalのHだよ。…病院からの贈り物さ。C.C.と云ふ〇字を重ねたのは、おそらくCharing Cross……まづそんな所だねえ。」

「そりや、そうかも知れぬ。」

「とにかく此の方に見込をつけるが本當だ。さてまづこれを有力な假定だときめる上には、そこかしこ、いろいろに此の訪客を彷彿させることが出来る。」

「よむ。ぢや假にC.C.H.をCharing Cross Hospitalとして、それを推理の上はどう影響させやうつて云ふのだ？」

「君にや判つて居る筈ぢやないか。僕の方法が、……それを應用しさへすればいいのだ。」

「よし、判つた。此の醫者は田舎に行く前にチャリング・クロス病院に居た。即ち、町醫者から田舎醫者になつたことが明瞭だ。」

「もすこし推理を深く進めなくつては駄目だよ。まづ一寸考へて見たまへ。此の杖なる贈物は、抑もどう云ふ機會になされたものであるかと云ふことをいつたり、友達相寄つて物を贈ると云ふものはね。先づ、此のドクトル・モルチマなる人が病院を退めて之れから開業でもしやうと云ふ際に有り勝ちなこと、考へねばならぬ。屹度その際の贈物だ。で、町の病院から、田舎の開業醫と境遇が變化する。此の杖は病院生活と開業生活との境遇線を示すものだ」と推定するのだねえ。」

「それは恐らく確かにさうだらう。」

「で更に進んでかう云へる。此の醫者は決して病院で有力な位置に居たものではない。此の病院で有力な地位を占める位な人物なら倫敦でも指折の醫者だし、指折りの醫者が田舎に開業することなどは思ひもよらぬからねえ。ちや、何物だらう。彼は病院には居たが、有力な地位には居ない。云はいつまらぬ代診位が關の山——先づ書生に一寸輪をかけた位に過ぎまい。で此の杖に彫りつけた年號からおして、今から五年前に此の病院を退職した。さあかうなると、君の所謂老醫師・たいしたものだよが急にぐらつて影が薄くなるんぢやないかね。まづ三十未滿のお人好しの、あまり野心の燃え立ちさうもない、ぼかんとした男で、そいつ一疋の犬を飼つて居る。その犬がね。まづテリア種よりは大きくマスチフ種よりは小さいところだね。」

と云つて、彼は得々として椅子に溜きながら、青い煙草の煙の輪を天井に

向けて吐きだしてゆら／＼さして居る。

(中略)

「しかし、まあま、田舎醫者との中させた所は君にして上出来だ。僕の推測を白状しやうや。まづその形容詞の方から片づけるが、お人好しだと云つたのは、這麼杖みたいな贈物をおくられる人間は必ずお人好しの愛嬌ものにきまつて居るし、あまり野心の燃えたちさうもないと云つたのは、倫敦を捨て、田舎に行く所を見てもわかるぢやないか。ぼかんとした男と云ふのは要するにボカンとして、他人の部屋に留守中一時も待ちながら名刺も置かないで、杖を忘れて居る所に面目が躍如として居るぢやないかね。」

「ぢや犬は？」

「その犬が。此の杖を口に咥へてよく御主人に随いて行つたものらしいよ。何しろ杖が重いから犬め、中央へんをしつかり咥へたので、齒の跡が明瞭

について居る。此の跡から推して見てだ、テリア種にしてはすこし齒跡が大きすぎるし。マスタフ種程に大きくもない。さうさう、なあんだ馬鹿馬鹿しい、縮れつ毛のスパニエルだよ。」(加藤朝鳥氏譯に依る)

これは留守跡の訪問者が忘れて行つたステッキに依つて、其の人間の何者なるかを推測し得た一例であるが、すべて忍術者たる者は、かういふ的確精透な推測に依つて、假定と實際とを符合させることを、十分に練習し抜き、事物を鑑識する智識と眼孔とを養ふ必要があるのである。

ト 觀相術及び人心觀破術

觀相術の忍術者に必要な事は、名取青龍軒の『正忍記』にも細に述べられてある。併し、これには古今東西の觀相術とか骨相學とか云ふものが、種々あつて、これだけでも一部の専門になるのであるから、本書では之を省略する事にする。又、對者の言語、舉動、面色等に依つて、其の内部に懐く所の情偽を察知す

る、人心觀破術なるものも、忍術者に取つて無論必要ではあるが、これは人々以心傳心に會得すべきものであつて、形式に拘泥すると却つて本旨を失するから、忍術を主題とする所の本書に於ては、餘りに枝葉の多きに渡ることを避ける必要から、矢張り問題に置く事を定めた。

チ 人を謀るの術

これは、忍術の中にも全然「心意的方面」に屬するものであつて、先づ、忍術に於ての人を謀る術と云へば、普通に、

一人の忍。

二人の忍。

三人の忍。

と云ふものを意味するのである。

其中、「二人の忍」とは怎ういふ事を意味するかと云ふに。

一人で、人家の内部を偵察する場合である。總じて忍術なるものは、其の性質上隠にして察するを尙ぶものであるから、二人三人力を併せて行ふよりは、成るべく、一人で誰にも知らずに行ふことを主眼としてゐる。随つて、一人の忍は忍術の常法である。其の適例を挙げると、知らぬ人家に入つて怪しみを受けずに内部を偵察するには、普通に「急病の術」と云ふものを用ゐるとしてある。其の法先づ、急病を装うて人家に入り、持ち合せの薬を飲みたいから湯を貰ひたいと頼み、何時もの事で、薬さへ飲めば必ず癒るからと安心させ、早速快くなつたと云つて、非常に有難さうに禮を述べて、其の日は其の儘立ち去つて了ふ。さうして、翌る日、若しくは一日二日と置いてから、何か手土産を携へて、先日の禮に赴く。此の際其の家の子供の喜ぶ物を持つて行くが上策、女房の喜ぶ物を持つて行くが中策、主人の喜ぶ物を持つて行くが下策とされてある。斯くして其の家の人に取

り入り、素知らぬ顔をして巧に偵察の事を行ふのである。

それから、「一人の忍」で都合の悪い時には、「二人の忍」を用ひなければならぬ。

其の術には、「喧嘩の術」と「尋ね人の術」との二種あるが、前者は、其の家の前で擬の喧嘩を始め、一人が負けて其の家へ逃げ込む。家の者共が大騒ぎして其奴を追ひ出す。其奴は屋敷の中を逃げ迷うて隠れ所を探す。其處へ、一人が勝つた方になつて、恐ろしい見服で、何故俺の對手を隠したと嗷鳴り込む。いや隠したのではないと云ふと、そんなら逃したに相違ないと益々憤り立つ。其のどさくさ紛れに、負けた方になつた奴は疾くも逃げ失せる。そんな事をしてゐる中に、段々判つた振をして、いや騒がして済まなかつたと、勝つた方がおとなしくなつて詫を云ひ、どうも、一時の腹立ちから人と喧嘩をしたが、我乍ら詰らない事をしたなど、仕舞ひには

笑ひ話にして、恥入つた體にもてなし、身體の痛み所を覚えて来たなど、腰を掛けて時を移し、あはよくは其の場で偵察を行ひ、前の例の如く、後で手土産を持つて禮に来ることにする。次に後者の「尋ね人の術」は、先づ一人の者が人家へ駆け込んで、追手に迫られて困るから隠まつて呉れと頼む。斷られるに極つてゐるから、其の時、裏口があらば、無理にも裏口から出して貰ひ、無ければ表から出る。暫く経つと、一人は追手となつて其の家に入り、おまへの家で逃走者を隠まつたに違ひ無いと談判し、それから先は、「喧嘩の術」と同じく折れて出るか、或は何處迄も迫つて、表裏を検めるか、其の時の宜しきに随つて偵察を行ふのである。

三人となると、旨くする事が一致し兼ねる場合が多いから、滅多に用ゐぬ方はいゝが、併し、それも已むを得ずして「三人の忍」を用ゐなければならぬ場合がある。

三人の忍には「作り文の術」と云ふのをを用ゐるのが普通である。其の法先づ一人の者が目的の家と心易い者の手紙に擬せたものを持ち、若しくは使と偽つて行き、其の人が出先で急病を起したとか、思はぬ災難に遭つたとか云ひ拵へ、主人を同道して出る。さうして少し経つてから、次の一人の者が慌たゞしく其の家へ駆け込み、大變だ、此の家の主人が今擬の使に連れられて行き、悪者共に取り込められて恐しい目に逢つてゐると、騒ぎ立て、報告する。そこで、全家の者が狼狽して立ち出でる。所へ、隙かきず第三の一人が入つて、旨々と偵察の役目を遂げるのである。

以上は、例の唯だ一端に過ぎぬので、すべて此の筆法に依つて、大所にも小所にも人を謀るの術を用ゐるのが、忍術者の常なのである。

なほ、表向きの使者に忍術者を附けて、敵中に送ることを、忍術では、牛馬の傳へ。

と云ひ、又、本道を避けて脇から出入することを、

虎狼の習ひ。

と云ふが、此の己れから他へ送る使者及び、他から己れへ来る使者を利用して、孫子の所謂「五間」を行ひ、別けて、反間、死間など、云ふ、間者の法の中でも、最も深毒な人を謀るの術を行ふのが、忍術の中でも至極高級の部なのである。

反間の例としては、漢の張良の謀で、敵國の楚から来た使者を利用して、首尾よく、敵の軍師范増に立場を失はしめて、遂に憤死せしめた事などが、其の著しいものである。即ち、楚王項羽から来た使者を、態と、軍師范増から来た密使と誤つた體にもてなし、無論、范増とは以前から密に氣脈を通じてゐた様に思はせ、非常に其の使者を優遇して、頻りに范増の消息を問ひ、聽て、中程から初めて范増の使者でないかと判つて、大いに失望した體に見せ、急に打つて變つた非常の冷遇を與へたので、使者は歸つて、其の事を項羽に訴へると、

淺薄な項羽は忽ち范増を疑ひ、之を斥けて憤死するに及ばしめたのである。

三國時代に呉の黄蓋が、其の都督周瑜と謀つて、敵將曹操から間者に入つてゐる者の前で周瑜と擬の争論を爲し、痛く咎たれて、之を恨み曹操に通ずる體に作り、曹操の間者からの報告と、黄蓋から曹操への降書と符合する様にしたのは、是れ苦肉の謀を用いた反間で、前の例よりも一層極端である。

死間は、反間よりも更に一層深毒陰悪なるもので、己れ死して間を行ふ場合と、又、人を殺して間に用ゐる場合とがある。前者の適例には、作り話ながら、淨瑠璃の「辨慶上使之段」が一番早判りである。即ち、義經の奥方卿の君の身代りとして辨慶が其の娘しのぶを殺したのに、郷の君の守役なる侍従太郎が自殺して己れの首を添へたのは、郷の君の似せ首を眞物と思はせる爲の謀で、即ち是れ死して人を欺く死間である。又後者の例としては、毛利元就が、死刑免れ難き罪人を利用し、此の役仕らば一命を助くべしと云つて、之を順禮姿に

打扮たせ、其の肌には、敵尼子氏の同盟者たる新宮黨へ宛てた密書を附けさせて出し、更に仲間頭の武功ある者を之と同行させ、尼子の領内なる雲州の山中で件の罪人を不意に斬殺させた上、文箱を附けた儘の死骸を路に棄て置かせ、以て尼子氏をして新宮黨を疑はしめ、敵の勢力を殺ぐの材料に供した事實を擧げ得るのである。

以上はすべて忍術の範圍で、恚ういふ人も謀るの辛辣極まる方法は、他にいくらかもあるのであるが、讀者に對しては、一斑に依つて全豹を推さんことを求めなければならぬ。同時に、そこが即ち忍術的なる所以である。

リ 呪文結印と其の正當なる解釋

忍術者と云へば、指で印を結んで、口に呪文を唱へると、忽ち其處に不思議を現したり、又は掻き消す如く姿が失せるものゝ様に、俗間には傳へられ來つたが、實際そんな筈棒な事が出来る筈のものではなく、又、縦合出来る理があ

るとしても、忍術者はさういふ修行をするものではない。

然し、そんなら、忍術には呪文結印の問題が無いものであるかと云ふた、又さうでもなく、それ／＼場合に應じての、呪文結印の方法が規定されてある、要り、呪文結印には何の必要があつて、且つ怎麼効果を呈するものであるかと云ふに。これは、精神と身體とを併せて統一して、目的に向つて全我を没入せしむる所の、一種の自己催眠に他ならぬのである。

故に此の呪文結印は、肯て眞言行者や山伏の爲る事を學ぶ必要がある譯でなく、如何なる呪文でも、如何なる印の結び方でも、それ自身に神秘性を有し、神秘力を著へた譯ではない。だから、必ずしも、『オンアボキヤ』だの『ベイロシヤ』だの『ソワカ』だの『ソモコ』だのと唸るには及ばないので、『天地玄黄宇宙洪荒』でも、『天智天皇秋の田の』でも、『イツト、イズ、エ、ドック』でも、『爾來』でも、何でも構はず、唱へる文句は何でも蚊でも、唯だ、それに依つて精

神を統一すると共に、精神と併せて身體をも統一し、恁う唱へて進み入れば、必ず目的を遂げ得るとの確信状態を得べく自己を催眠し了ふすれば足るのである。譬へば、『佛とは何であるか。』と問はれた時、若し、眞に悟を開いて佛の何物なるを知つた人間ならば、『肥柄杓である。』と答へても通るし、『山雀の食ひ物である。』と答へても通るし、『蟹に拾はれた柿の種である。』と答へても亦通ると同じく、云はゞ符牒に過ぎない文句などは、怎でもいゝのである。但し、以上は呪文に就いて述べたのであが、印を結ぶことも矢張りこれと同じ理で、必ずしも掌の中に妙な文字や象形を描いて、指を握り隠さなければならぬと云ふ譯では無く、上齒と下齒とを叩き合はさなければならぬでもない。兩手の拇指と食指とを合せて圓を描かうとも、兩手兩脚を張つて力んだ形にならうとも、舌を出さうとも、赤んべえを仕様とも、其の根本の要旨さへ得たならば、すべて立派な結印となるのである。

なほ、以上の見地からして、單に讀者の參考迄に、古への忍術者が用ゐた秘法の符の作り方を、二つばかり御示し申さう。

先づ、一代の間、人に狙え撃たれぬ護符としては

寛政噫々如律令

と、七寸四方に切つて馬糞紙に書き、閨の巽の隅に貼り置くべしとある。又、常に垢離を取り身を淨めて之を懐中しても宜しいと云つてある。

次には己と人との仲を好くし、又悪くする守符と云ふものがある。

房
朋
川
國
川
本
是
念

と云ふ變な字でもない模様でもないものを紙に書き、傍に年月日と年月日の下に自分の名と先方の人の名とを並べて書くので、仲をよく仕様と思ふ時には、以上全體と密接して少しの隙間が無い様に書き、又、仲を悪く仕様と思ふ時に

は、以上すべてをばらばらに離して書くのである。

無論呪文結印のそれと同じ理合で、何もそんな變挺な文字様のものに意義がある譯でなく、又、あり得べき筈も無い。唯、これに依つて、自分の心に確實な安心を得、若しくは、必ず仲を好くし得るとか、悪くし得るとか、確かに信じ得られるならば、それが實地に當つて狐疑せず勇斷する助けとなり、要り結果に於て、其の怪しい模様が神秘力を發揮したと同じ事になるのである。

又 忍術を研究するの効果

今日に於て、忍術を研究して何の利益があると云ふ問題を解決し、以て本書の結論に充てやう。

今日に於て忍術を研究する事は、少くとも三個の著しい利益を結果するのである。

第一には、今日一般に誤り傳へられてゐる忍術なるもの、真相を明かにして、

之に對する正確なる智識を得るの利益がある。最も是れは、机上に於ける理論上の研究を意味するので、私の研究は主として此の方面である。

第二には、頭腦を機敏にし、體軀を輕捷にし、精神と身體とを併せて統一して、すべて、目的に向つて全我を没入しつゝ、宜しきを得るの効果を擧げる利益がある。但しこれは、實地に忍術を研究する場合を意味するのである。

第三には、神機妙算湧いて泉の如く、其の源滾々として盡きざると共に、能く他人を看破して、權謀術數に乘せられることを避け得るの利がある。

忍術と兵法とは、根源に於て一致し、而して兵法と處世術とは、亦是れ根源に於て一致してゐるのである。『睫毛に止まつて目を逃れよ。』と、是れ忍術の奥儀を一語に盡した至言である。

忍術の極意 完

大正六年五月十五日 印刷
大正六年五月二十日 發行
大正十年八月六日 卅版發行

改正 壹圓貳拾錢

著者 伊藤 藤銀 二

東京市四谷區永住町三番地

發行者 相良 邦之助

東京市四谷區佐久間町二丁目十八番地

印刷者 植田 庄助

東京市芝區櫻川町二十番地

發行所 東京市芝區南佐久間町二丁目十八番地
武俠世界社

電話芝二四一八番
櫻井東京三四〇六〇番

友の年少的動活

雜誌

武俠世界

月刊

錢十五價定 行發日一回一月每

見よ勇壯活潑なる活文字！	血湧き肉躍る鐵血的記事！	前代未聞の痛快活動奇譚！	悲壯慘憺たる戦争實見記！	驚神駭目すべき科學世界！	波瀾重疊の冒險探偵小説！	滿紙盡く驚天動地の快談！	眞に是れ少年必讀の雜誌！
--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------

武俠世界社發兌 東京芝區 振替三〇四〇六

32K-1



終